

# 小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅵ

隆明寺跡確認調査

松谷寺跡確認調査

2010. 3

石川県小松市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、石川県小松市内において小松市教育委員会が実施した重要遺跡詳細分布調査の報告書である。
  2. 確認調査及び出土品整理・報告書刊行は、文化庁補助金事業により実施した。
  3. 対象となった埋蔵文化財並びに、調査地、調査原因、調査面積、調査期間、調査担当は次のとおりである。
- 【隆明寺跡、遊泉寺・クボタB遺跡】
- 〈調査地〉 小松市立明寺町
- 〈調査原因〉 重要遺跡詳細分布調査
- 〈調査面積〉 約9,900㎡
- 〈調査期間〉 2004. 12. 14～2005. 3. 25  
2006. 2. 28～2006. 3. 24
- 〈調査担当〉 西田由美子・川畑謙二

### 【松谷跡】

- 〈調査地〉 小松市五国寺町
- 〈調査原因〉 重要遺跡詳細分布調査
- 〈調査面積〉 約8,000㎡
- 〈調査期間〉 2006. 11. 20～2006. 12. 25  
2007. 8. 1～2007. 9. 27  
2008. 5. 28～2008. 8. 19  
2009. 7. 13～2009. 9. 15
- 〈調査担当〉 坂下義規・川畑謙二
4. 確認調査は、(社)小松市シルバー人材センターに作業員を委託した。遺構の実測は、各担当者が行った。
  5. 出土品整理及び報告書作成は、平成21年度事業として臨時作業員を雇用し、川畑が担当した。
  6. 写真撮影については、遺構は各調査担当者が、遺物は川畑が実施した。
  7. 本書の執筆及び編集については、川畑が担当した。
  8. 本調査において出土した遺物及び遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。
  9. 現地調査から報告書刊行に至るまでには、下記の機関・個人等の協力を賜った。記して謝意を表する。

立明寺町町内会、五国寺町町内会

上原真人、岡崎晋明、垣内光次郎、川畑誠、木立雅朗、久保智康、坂井秀弥、吉岡康暢、和田龍介、地権者の皆様

## 凡 例

1. 本書に示す座標は世界測地系（Ⅶ系）に準拠している。
2. 本書で示す方位は、全て座標北である。水準高は海拔高（T.P）で示している。
3. 本書に示す土色は、マンセル表色系に準拠している。

## 目 次

### 例言・凡例

### 第Ⅰ章 位置と環境

- 第1節 位置及び地理的環境…………… 1
- 第2節 歴史的環境…………… 1

### 第Ⅱ章 隆明寺跡確認調査

- 第1節 調査に至る経緯等…………… 5
- 第2節 調査の経過…………… 5
- 第3節 確認調査の成果…………… 9
- 第4節 出土遺物……………22
- 第5節 小結……………40

### 第Ⅲ章 松谷寺跡確認調査

- 第1節 調査に至る経緯等……………44
- 第2節 調査の経過……………44
- 第3節 確認調査の成果……………46
- 第4節 出土遺物……………64
- 第5節 小結……………66

写真図版 1～14

報告書抄録

# 第 I 章 位置と環境

## 第 1 節 位置及び地理的環境

報告遺跡は、小松市立明寺町地内及び、五国寺町地内に位置する。小松市は石川県西南部に位置し、現在、人口約 11 万人を擁する県下第 3 の都市である。市域は面積 371.13km<sup>2</sup>と広大で、南縁部は大日山（標高 1368 m）で福井県勝山市との県境があり、東縁部・北縁部は白山市・能美市、西縁部は加賀市や日本海に接している。地形は大きく北西部の砂丘・平野と、市域の大部分を占める南東部の能美江沼丘陵・能美山地などに分かれる。全長約 42km、流域面積 271km<sup>2</sup>を測り、県下第 3 位の流域面積を誇る梯川が市域を流れ、下流域の沖積平野上には市街地が形成されている。梯川は、白山山系の大日連峰を源に発し、西俣川、大杉谷川、郷谷川、葦上川、鍋谷川、八丁川などが合流して日本海に注いでいる。



第 1 図 小松市の位置

隆明寺跡推定地は、その梯川が南から西へ上

大きく流れを変え、地点付近にあり、交流仏大寺川によって形成された谷の頭に位置している。松谷寺跡推定地は、梯川本流によって形成された主谷における河岸段丘地帯の、やや奥まった位置にある支谷に位置する。両調査地は標高 30～50 m 程度の低丘陵上に立地しており、険しい山中にあるわけではない。よって、近世～近代には、平坦面は耕作地として利用されており、遺構の確認が困難な場合も多い。現在、能美江沼丘陵は、ほぼ全域が杉・松・檜などで植林され、針葉樹林帯となっている。原植生を残す箇所は非常に少ないが、中海地区にはジャクシンの古木があり、樹齢 600 年を数える。また、さらに平野部に近い箇所だが、埴田町徳橋神社の社叢には、自然植生が残っている。ヤブツバキラス城の代表的なものであり、能美江沼丘陵の古代・中世的環境復元において重要なものといえる。

一方で、能美江沼丘陵では、過去には広く凝灰岩の切り出しが行われており、東部丘陵域でも石切り場が点在する。周辺の中世遺跡からは、石臼・行火などの生活用具から、五輪塔を始めとする石塔類が出土しており、在地に流通していたことが判明している。また、江戸時代には、小松城の石垣にも多く使用され、石材から八里～大野にかけて分布する凝灰岩から切り出されたものだそう（関戸信次氏教示）。このように、能美江沼丘陵は古来より人々の生活と関わってきた里山であったが、近年手入れされる山が減少し、荒廃が進行してきている。

## 第 2 節 歴史的環境

当該調査対象である中宮八院を含め、多くの寺院並びに関連遺跡が存在する。その分布から、信仰の中心的な役割を担ったとされる聖地が「観音山」であったことが考えられる。観音山は標高 4023

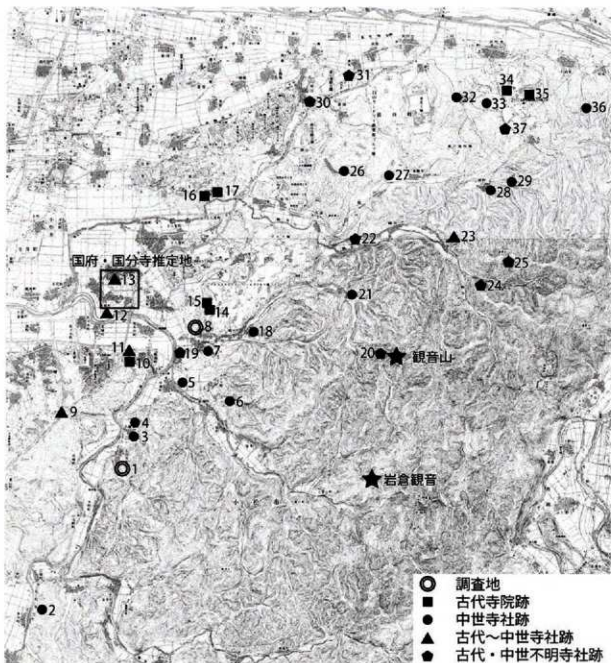
mの低山で、形の良い山である。山頂からやや下った平坦面に遣水山観音堂(20)があり、観音像が現在も祀られている。養老3年(720)泰澄開基の伝承があり、白山信仰における御前峰の本地仏を勧請した可能性も考えられている。

ただし、寺院建立の開始は、白山三所権現の成立より古く、8世紀前半には松谷廃寺跡(1)(中宮八院の松谷寺と区別するため、この呼称とする)が成立する。これについては、報告で詳述する。8世紀中頃には宮竹うっしょやまA遺跡(35)が成立したようで、平野部からやや奥まった丘陵斜面を造成し、南面配置をとる。手取川扇状地側に近い位置にあり、式内社滝浪神社が近接地に所在している。特に、8世紀中頃の「大坂寺」墨書土器が目される。関連遺跡として、別尾根に庄が屋敷B遺跡が存在している。なお、遺物は12世紀までみられるが、山林寺院として機能した時期を8世紀後半の極短期間とする意見もある(望月精司氏教示)。平安時代以降には、加賀国成立期頃の9世紀前葉に、八里向山B遺跡(16)が成立する。尾根先端部を造成して、東面配置をとる。一堂二宇型で、礎石建物の本堂を建立している。9世紀前葉～第3四半期という、極短期間で廃絶している。9世紀後葉には里川E遺跡(14)が成立する。狭い谷の東側丘陵中程に立地し、斜面を削り三方を掘削法面で囲む凹地を造成している。礎石建物の主堂を持ち、南西配置の一堂二宇形式である。存続期間は9世紀後葉～10世紀初頭で、これも短期間で廃絶している。また、両者とも別尾根に八里向山C遺跡(17)や里川F遺跡(15)という関連遺跡を持つ。浄水寺跡(9)は、通称「キヨミズ山」(標高約63.5m)の、三方を尾根に囲まれた南側緩斜面に立地する。平野部からは見えず、谷頭から約1km奥まった位置にある。大小20面の整地地面をもち、大型礎石建物と掘立柱建物30棟以上が確認されている。時期は土器から8世紀前半～15世紀後半の長期に渡る存続が認められ、0～IV期に区分される(柿田2008)。特に、初期貿易陶磁器や、緑釉陶器・灰釉陶器を仏具として持ち、10世紀代前半に大溝への大量の墨書土器廃棄が見られるI期(9世紀後半～10世紀後半)と、礎石建ちの大規模本堂が建立され、寺院が拡大・発展するII期(11世紀前半～12世紀)の様相が目される。

これらと対応関係にある平地寺院については、一部瓦葺の屋根を持つとされる国分寺推定地(十九堂山遺跡(13))や国分尼寺説もある軽海廃寺跡(10)もあるが、その実態は不明瞭であり、位置は確定していない。ただし、本書で述べる隆明寺跡推定地(8)内から発見された瓦陶兼窯跡は、その実態に迫る重要な発見といえる。また、辰口廃寺跡(30)や来九天明寺跡(31)も平地寺院の可能性はあるが、実態は全く不明である。

以上の調査結果からは、各寺院の宗派性を導き出すのは困難である。ただし、浄水寺においては、雑密系の仏具が出土しており、密教の影響が考えられる。また、十一面観音と思われる尊像を押し出した銅板(懸仏か)が出土しており、白山信仰の尊像を祀ったことが考えられる。なお、中宮八院は、国術との密接な関係で成立した寺院が、次第に白山信仰と結び付きを強め平安末頃までに組織されたものと推察されるが(木越2005)、実態は位置も含めて不明のままである。しかし、この頃には、白山の天台化にあわせて、天台系の教義が主流であったと考えられる。

一方で、観音山北部の区域には、多くの中世寺院が成立したが、必ずしも白山系ではなかったようだ。宮竹うっしょやまA遺跡近接地に、成立時期は不明瞭だが、滝谷寺跡(33)が建立される。同寺は、真言宗寺院として中世に発展したという伝承がある。また、滝や式内社滝浪神社が近接した位置にあり、滝を聖地として、寺院・神社・経塚・中世墓が展開する霊場と化していた可能性が想定される。また、高野山周辺の鍋谷延願寺跡(23)・坪野妙観寺跡(28)・坪野智永寺跡(29)は、天台か真言宗系と考えられる寺院跡である。鍋谷延願寺跡からは、須恵器が採取されており、古代から継続する長期型の寺院の可能性もある。また、坪野妙観寺跡からは、加賀の破片と石白が出土しており、鎌



第2図 観音山周辺の寺社関連遺跡位置図(1/75,000)

第1表 遺跡地名表

番号	遺跡名称	種別	時代・備考
1	松竹寺跡(推定地)	寺院跡	中世・中京八代
2	蓮花寺跡(推定地)	寺院跡	中世・中京八代
3	蓮花寺跡(推定地)	寺院跡	中世・中京八代
4	品輪寺跡(推定地)	寺院跡	中世・中京八代
5	中海山遺跡(真実寺跡)	集落跡・寺院跡?	中世・中京八代
6	藤原寺跡(推定地)	寺院跡	中世・中京八代
7	満願寺跡(推定地)	寺院跡	中世・中京八代
8	隆明寺跡(推定地)	寺院跡	中世・中京八代
9	浄土寺跡	寺院跡	奈良~中世
10	経高庵寺	寺院跡	平安・国分寺跡あり
11	西宮寺遺跡	寺院跡	平安~中世
12	龍社(伊南村(推定地))	神社跡	平安~中世
13	十六堂山[ジクトツヤマ]遺跡	寺院跡	平安・中世・国分寺推定地
14	聖川尾遺跡	寺院跡	平安
15	聖川尾遺跡	寺院跡	平安
16	八雲内山山遺跡	集落跡・寺院跡?	平安
17	八雲内山山遺跡	寺院跡	平安
18	常徳寺跡	寺院跡	室町
19	仏生寺跡	寺院跡	不詳

番号	遺跡名称	種別	時代・備考
20	蓮本山観音堂	堂舎	不詳・奉安基痕あり
21	仏大寺仏陀寺跡	寺院跡	中世
22	観音社跡	神社跡	不詳
23	観音延縁寺跡	寺院跡	中世
24	観音延縁寺遺跡	敷布地	古代
25	観音津上社跡	神社跡	不詳
26	徳山寺跡	寺院跡	中世
27	金剛寺跡	寺院跡	中世?
28	坪野山観音寺跡	寺院跡	中世・礎石あり?
29	坪野山観音寺跡	寺院跡	中世?
30	三日月寺跡	寺院跡	不詳
31	東九天明寺跡	寺院跡	不詳
32	長海堂寺跡	寺院跡	中世?真田遺構
33	清石寺跡	寺院跡	中世・礎石あり
34	庄(原)観音遺跡	寺院関連遺跡?	奈良・平安
35	宮竹ウッレヤマA遺跡	寺院跡	奈良・平安
36	岩本白鳥尾神社跡	神社跡	不詳・白山原本家敷家か?
37	大口長生寺跡	寺院跡	不詳

倉期の中世寺院とみられる。仏大寺仏陀寺跡(21)は、室町時代初期の貞治2年(1363)に曹洞宗の太源宗真が創建した仏陀寺とされ、現地には土塁や石垣などがあり、天目茶碗や中世陶器片が出土している。その太源禪師の跡を継承した梅山開本は、明徳2年(1391)頃までに金剛院(金剛寺跡(27))開いた。同寺は、永祿9年(1566)に戦乱により廃絶したという記録がある。これらは、曹洞宗の教線が当地に及んだことを示すものである。曹洞宗は、白山信仰系の草堂を拠点に布教を行ったという説があり、特に、仏陀寺の谷奥には遺水山観音堂があることから、元々は白山信仰の基盤があった地域ではないかと考えられる。

徳山寺跡(26)からは、銅製化仏(十一面観音像のものか?)や銅製香炉、煙管の雁首、15世紀初め頃の中国製無頸壺片、15世紀後半頃の瀬戸・美濃焼の天目茶碗片、中世陶器片が出土している。山翁浄真が住持し、康永元年(1342)の史料から、鎌倉覚園寺との深い関係が見られる。よって、室町時代初期には開基していたとみられ、戦国時代の天正8年(1580)に虚空蔵山城陥落と共に灰塵に帰したという伝承がある。覚園寺は、真言・浄土・律・臨済の四宗兼学の間であったが、徳山寺は臨済宗の系譜とみられている。

なお、加賀において、浄土真宗本願寺派の教線は、15世紀以降徐々に拡大してきており、聖徳太子金銅像が出土している常徳寺跡(18)や長滝宗誓寺跡(32)などから、当地にも及んでいたことがわかる。常徳寺は、今は金沢市寺町に所在するが、旧地を山上郷西山とし、後に鶴川に移転したものとされ、藤島超勝寺系の進出が推定される。長滝宗誓寺跡は、元々は道場であり、明治12年に寺号を得たが、大正7年に転出したそうである。また、遺跡地図には記載されていないが、吉藤専光寺を本寺とする清水道場があり、明応7年(1496)の史料により、この頃までには成立していたことがわかっている。16世紀には、善間坊という坊号を得ており、当地域における真宗の動向を解明する上で重要な寺院である。中世後期には、浄土真宗本願寺派が白山信仰(天台系)や禪宗、真言宗の地にも浸透したことがいえ、それが当地域での石造物遺立の減少、中世墓での石造物破壊と運動する可能性がある。

しかし、以上の寺院跡について、考古学的に実態が明らかになっているのは、発掘調査を実施した古代山林寺院跡以外にはないのが現状である。今後、今後考古学的な調査結果と文献史上の実態が錯綜する可能性は十分考えられる。また、地域史上重要な遺跡でもあるため、適切な保存を行うためにも実態把握調査が必要とされよう。

#### 引用参考文献

- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2008 『小松市浄水寺跡』(柿田 2008)  
木越祐壽 2005 『加賀国府と中宮八院』『フォーラム白山信仰の世界』小松市教育委員会  
久保智康 2008 『古代山林寺院の展開と松谷寺』『第25回まいぶん講座』小松市教育委員会  
小松市教育委員会 2004 『八里向山遺跡群』  
辰口町史編纂専門委員会編 1987年 『辰口町史』2前近代編 辰口町  
西野秀和 1988 『宮竹うっしょやま A 遺跡』『能美丘陵遺跡群Ⅲ』石川県立埋蔵文化財センター

## 第Ⅱ章 隆明寺跡確認調査

### 第1節 調査に至る経緯等

小松市には、古代加賀国の中樞施設であった加賀国府や加賀国分寺、白山信仰の重要寺院である中宮八院、そして一向一揆の舞台となった中世城郭遺跡など、重要な遺跡が多く所在している。ただし、これらの遺跡は所在地をはじめとして、その実態も把握されていないものが多く、現在、遺跡の具体的な保護政策を講じることができていない。

よって、これらの小松市にとって特に重要と判断され、将来的に保護していく必要性が高い遺跡を市内重要遺跡として位置づけ、所在地確認と遺跡の実態解明を目的とした確認調査を平成14年度より着手したものである。

平成16年度からは、小松市域において白山信仰の拠点となった重要な寺院跡である中宮八院の実態確認調査に着手した。第一候補として、8か所の推定地のなかで唯一、瓦や須恵器などの遺物が採取されていた小松市立明寺町所在の隆明寺跡を選定し、確認調査と測量調査を行った。

事前に立明寺町内会会長に対し調査協力依頼を提出し、地権者を対象に事業説明会を行った。その後、地権者からの承諾書を得て、石川県教育委員会へ発掘調査報告を平成17年2月25日付けで提出している。なお、測量調査に関しては、町内会役員会の了承のもと、確認調査に先行して平成16年12月14日より着手している。

平成16年度の調査において想定外の新規発見遺跡が確認されたため、調査を翌年度に継続することとなった。その旨町内会役員会にて事情説明を行い、石川県教育委員会へ発掘調査報告を平成18年2月7日付けで提出し、平成18年2月28日より調査に着手した。

事業費については、石川県教育委員会の同意の下、国庫補助事業として実施した。

### 第2節 調査の経過

#### 1. 現地調査の概要

今回の調査は、丘陵頂部に所在する隆明寺跡推定地と、その西側裾部に広がる平坦面に所在する遊泉寺・クボタB遺跡を対象に行った。隆明寺跡推定地は、植林された林であったが、比較的雑木が少なく、見通しが利く状態であった。一方で、遊泉寺・クボタB遺跡は開けた平坦地であったが、スキが全面生茂っており、全く見通しの利かない状態であったため、下草刈りを行った。

なお、両遺跡に挟まれた丘陵西側斜面の部分については、便宜上遊泉寺・クボタB遺跡に含めて取り扱った。ただし、平成16年度調査において「立明寺古墳」と「立明寺窟跡」が確認された後は、それらの遺跡名で取り扱いを行っている。また、平成17年度の調査において、立明寺窟跡に重複して「立明寺中世墓群」が存在していることが確認されている。

#### 2. 調査の経過

##### 〔平成16年度〕

現地調査期間は平成16年12月14日～平成17年3月25日までであるが、天候の良い時に測量を行い、トレンチ掘削調査は主として3月に行っている。

地形測量に関しては、調査区内に国土座標を業務委託により4点設定し、そのグリッド点の国土座標（世界測地系Ⅶ系、以下同）を基準として、隆明寺跡推定地は1/40縮尺、遊泉寺・クボタB遺

跡は1/50縮尺の地形図を調査員により作成した。

試掘調査は、隆明寺跡は9箇所、遊泉寺・クボタB遺跡は6カ所のトレンチを設定した。人力により掘り下げを行い、遺構の確認を主として行った。必要に応じて遺構の一部掘り下げも行い、内容及び土層の確認を行っている。

トレンチ調査に係る測量は、基本的に1/20縮尺で作成している。遺物は、トレンチ掘削に伴うもの及び

遺構の一部掘削で出土したものに限り取り上げた。重要なものに関しては位置の記録を行った（記録作成方法は、以降の年度も同様）。

その結果、立明寺古墳（古墳時代中期初頭）、礎敷遺構（時期不詳）、立明寺窟跡（飛鳥時代、7世紀第4四半期）の3遺跡が、新規に発見された。

なお、調査期間終了直前に、立明寺窟跡確認地区で方形に加工された凝灰岩を一点検出しており、建物礎石の可能性が考えられた。

### 〔平成17年度〕

昨年度調査において、3つの遺跡の新規発見があったため、隆明寺跡の確認調査としては不十分なものとなった。よって、次年度も継続して調査を行うこととなったものである。現地調査期間は、平成18年2月28日～平成18年3月24日まで実施し、昨年度、礎石の可能性のある切石の周辺部を中心にトレンチを設定し調査を行った。

地形測量は、昨年度設置の国土座標を基準として、1/50縮尺の地形図作成を行った。

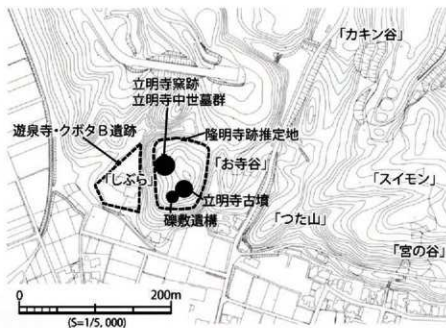
試掘調査は、人力により掘り下げを行い、前述の建物跡の確認を主要命題として行った。しかし、結果的に切石は五輪塔の地輪であることが判明し、立明寺窟跡の上位には、中世墓群が展開していることが確認された（立明寺中世墓群）。よって、調査を中世墓の範囲確認に切り替え、確認調査では上位遺構の下は掘削できないので、立明寺窟跡の窟体確認の実施は断念している。

なお、若干ではあるが立明寺古墳の分布状況の調査も行ったが、地滑り等地形変化のため有意な成果は得られなかった。

調査成果については、地元町内会及び関係者に、調査成果報告書を作成し送付している。

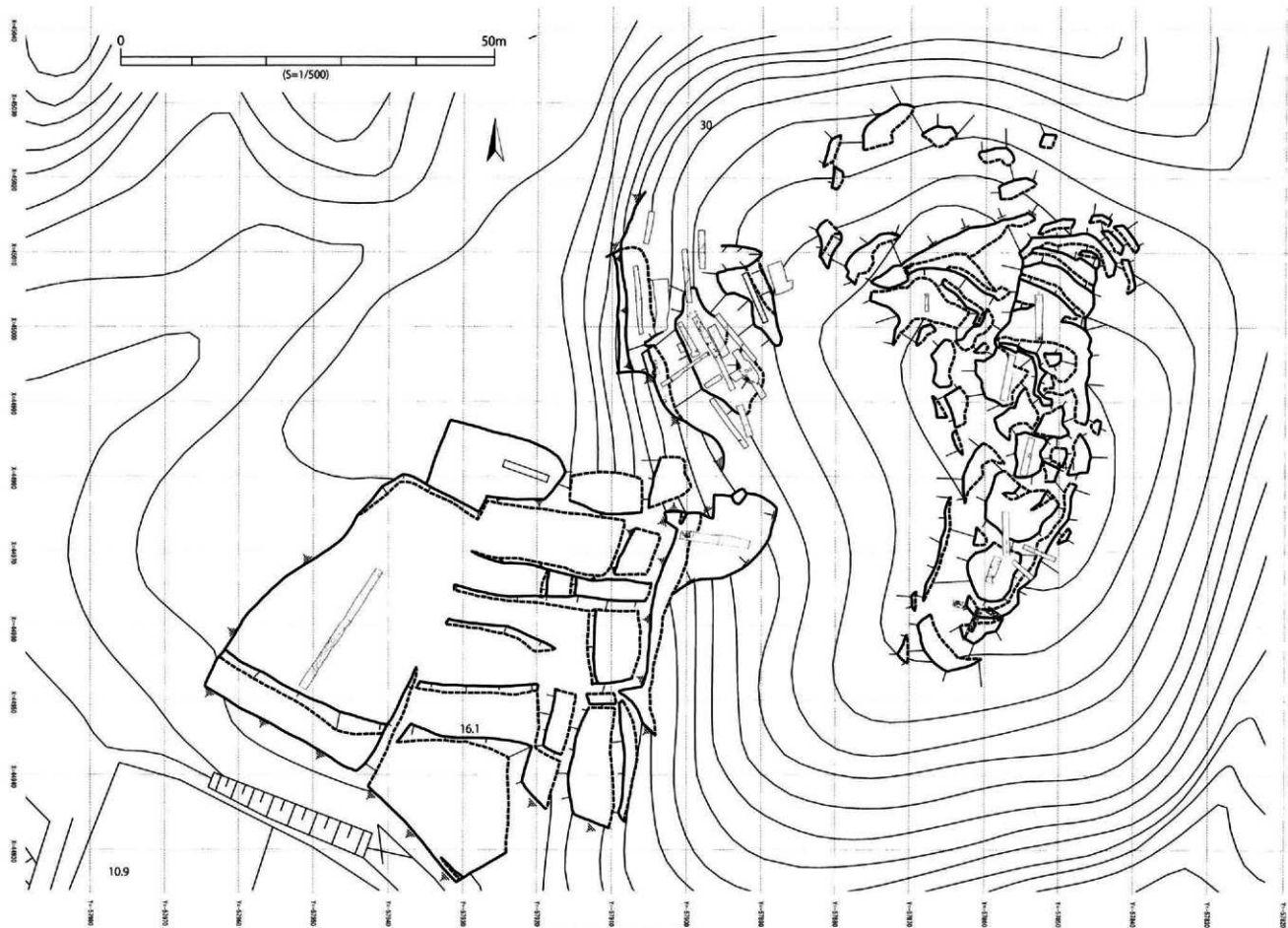
### 3. 出土品整理

出土遺物は、調査年度中に洗浄を、注記・接合作業を平成20年度に、分類・接合・実測作業を平成21年度に臨時整理作業員により行った。また、トレース等の報告書作成作業も同様に報告年度に実施したものである。



第3図 隆明寺跡 調査地位置図





第4図 隆明寺跡 測量図



### 第3節 確認調査の成果

#### 1. 調査地の概要

調査地は、仏大寺川により形成された谷部の開口部右岸側に位置し、平野が展開する直前の丘陵頂部と裾部にあたる。標高は、丘陵頂部で約38m、裾部平坦面の箇所でも約16mを測る。対岸には、湧泉寺跡推定地、仏生寺跡推定地、宮の奥経塚などの宗教遺跡が存在している。隆明寺跡推定地は、過去に古代の瓦片と須恵器片が採取されており、「立明寺」という町名と当地近接地に残る「お寺谷」という地名が相まって隆明寺跡推定地として認識されたものと推測される。ただし、丘陵頂部の平坦面は広いものではなく、寺院の展開には狭すぎると考えられた。よって、遊泉寺・クボタB遺跡側の広い平坦面にその存在が期待された。一方で、既に植林や耕作地開墾により削平された可能性も考えられ、平坦地の造成が何時の時代なのか判断することも重要な課題となった。

#### 2. 遊泉寺・クボタB遺跡地区

当該地区は、平野部に向けた平坦面と隆明寺跡推定地に続く丘陵斜面を対象としている。この区域のみ近年まで植林されておらず、林業による影響は少ない。平坦面と緩斜面との間は、幅約4～2.5mの土手状に切り残された部分により連結されている。平坦面は、大きく東西に分けることができ、東側が広大な面を有するのに対し、西側は細かく段によって区分けされている。区画は、最奥部の広いもので約18m×8mを測り、面積約144㎡である。ただし、この区画は後世の耕作地利用と地境の設定によるものと推察される。特に最奥部は水田化されており、耕作が放棄された現在でも水が抜けず泥状を呈している。試掘トレンチは、東側平坦面と最奥部の一段高い平坦面及び、斜面を造成したテラス面の存在が疑われた緩斜面部分を対象に実施している。西側の小区画平坦面については、現在も畑地として利用され、耕作物が植わっていることもあり、トレンチ調査の対象から除外している。

##### (1) トレンチB1

西側平坦面上に設定した試掘トレンチで、土坑状遺構（SK-1）と、ピット状のプランが確認された。なお、大規模な擾乱穴も検出されており、後世における造成の影響を受けているとみられ、平坦面もやや削平されているようである。しかし、2層土内から少量ではあるが、須恵器片が出土しており、立明寺窯跡のものと考えられる。また、10～11世紀代とみられるロクロ土師器境Bの底部が出土しており、平安後期の遺物も確認された。

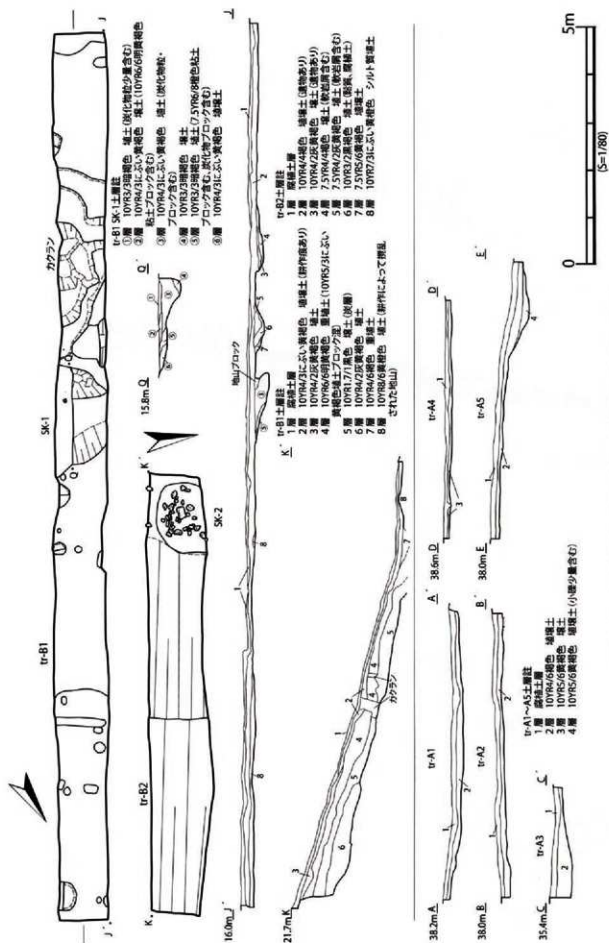
##### 〔SK-1〕

トレンチのはほぼ中央部で検出された楕円形の土坑である。検出最大幅約240cmを測る。底部の南端が一段深く抉られており不整形ではある。しかし、擾乱とは異なる埋土であり、遺物も出土したことから遺構と判断した。遺物は、須恵器片と瓦片であり、後述の立明寺窯跡に関連する可能性がある。

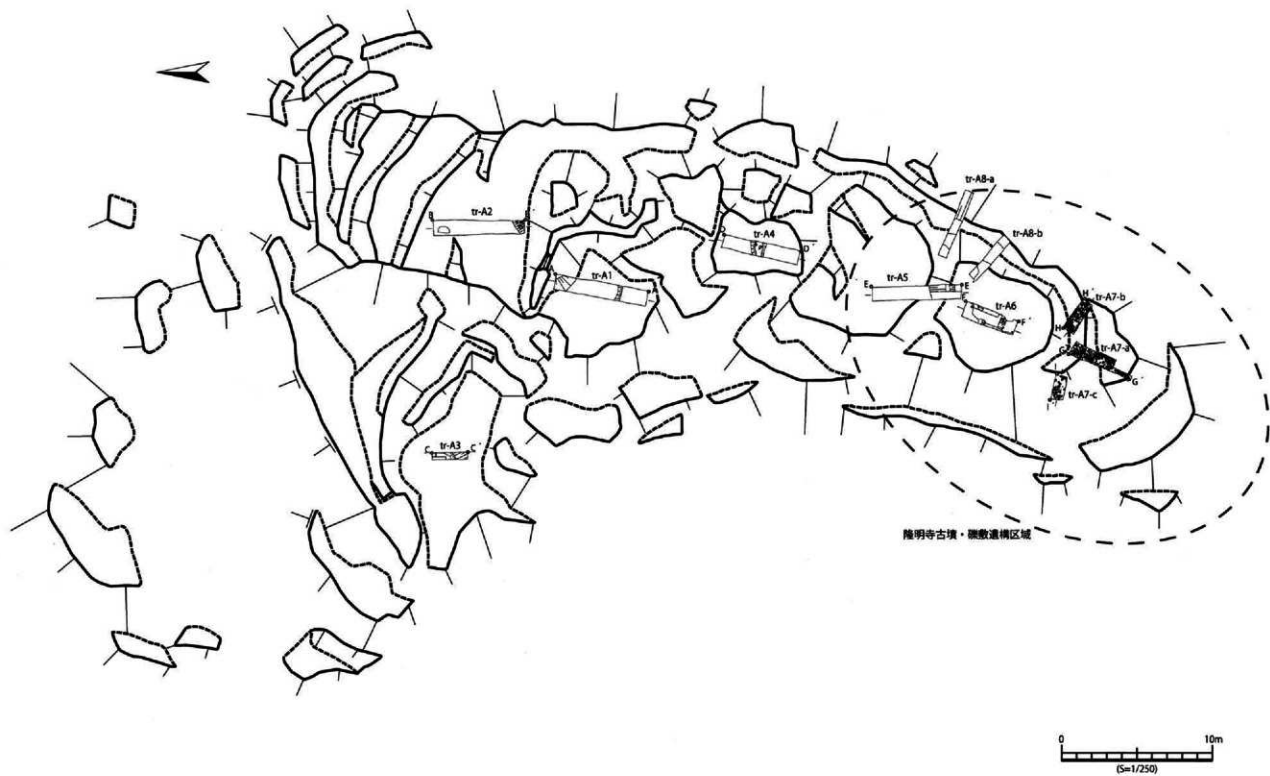
##### (2) トレンチB2

土層断面上において、緩斜面と平行して堆積している状況が確認され、平坦面の造成は行われていない。また、遺物を含んでいる層は上位の2・3層のみであり、その内容も同斜面北方にある立明寺窯跡から派生した土器片及び瓦片である。なお、斜面裾部において、確認径約130cmを測る土坑状プラン（SK-2）が検出されており、上面に小礫及び瓦片の集積が確認された。これも立明寺窯跡に関連した遺構と考えられる。

また、本トレンチからも10～11世紀代とみられるロクロ土師器境Aか小皿の底部が出土している。遺物に関しては、平坦面と斜面がつながったことになり、平安時代後期以降にも当地において何らかの活動を行ったことは推定可能であろう。

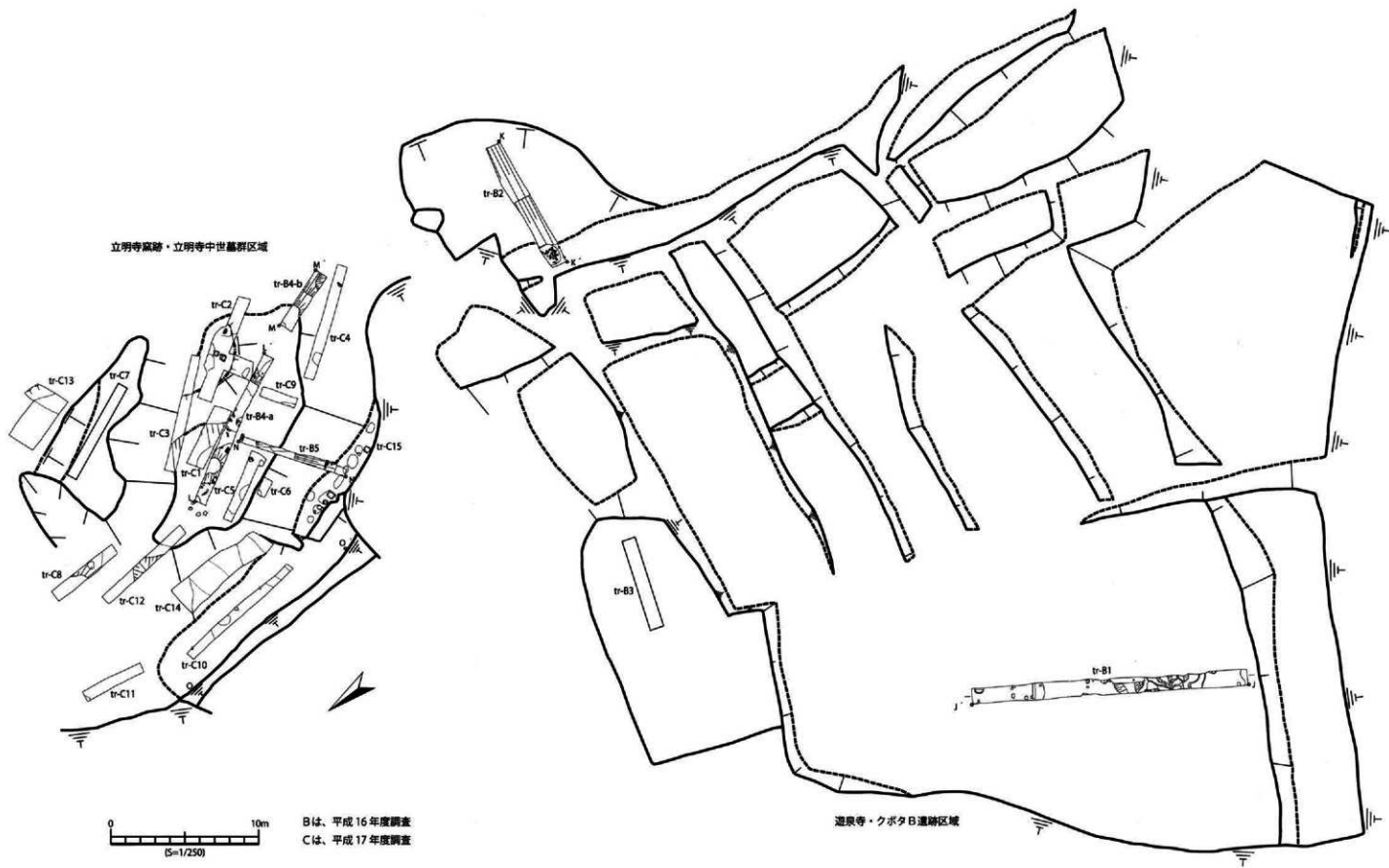


第5図 遊泉寺・クボタ日蓮跡・レンチ実測図・隆明寺地区・レンチ断面図



第6図 隆明寺地区(A地区)地形及びトレンチ手実測図

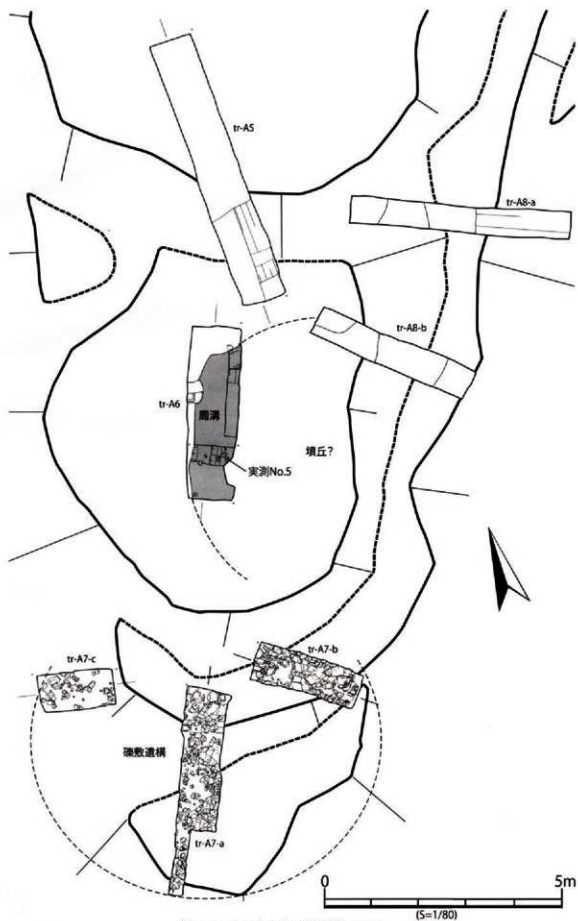




第7図 遊泉寺・クボタB遺跡地区(B・C地区)地形及びトレンチ実測図







第8図 立明寺古墳・石敷遺構平面図

### (3) トレンチB3

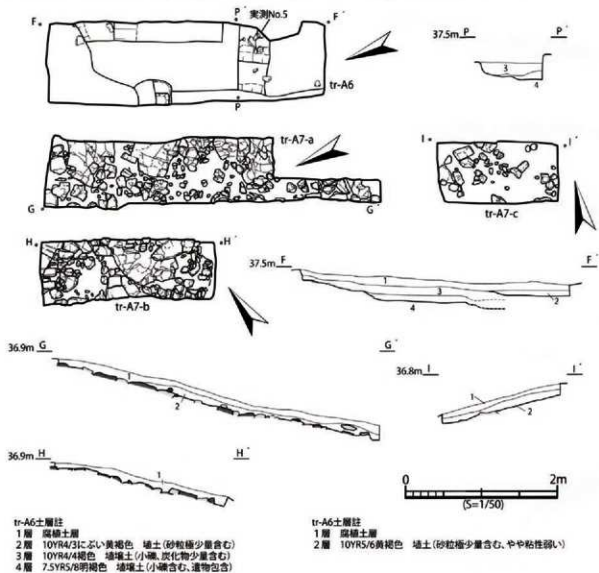
当該トレンチでは、深さ1m以上掘り下げを行ったが、地山面は検出することができなかった。最奥部に位置する一段高い平坦面であったが、全て盛土によって造成されたものと判断された。出土物も全て盛土内混入である。さて、地山層が存在しない理由であるが、この辺りでも陶土の採掘を行っていたことによるものと判明している。地元の方の話によると、この地点のみではなく、広範囲に行ったようで、他の平坦面にも影響があることが予想される。谷奥の堤の造成とともに、この辺りの丘陵端部が崖状になっている理由の一つと考えられる。

### 3. 隆明寺跡・立明寺古墳・礫敷遺構地区

山頂部分は、小平坦面が連続する不自然な地形であることから、隆明寺跡推定地と包蔵地指定されている。しかし、前述のとおり痩せ尾根であり、各平坦面が狭すぎることから寺院の存在は疑問視された。各小平坦面を対象としたトレンチA1～5においては、遺構・遺物は検出されなかった。しかし、丘陵先端部のトレンチにおいて予想外の遺跡（立明寺古墳・礫敷遺構）が発見された。

#### (1) 立明寺古墳（トレンチA6）

トレンチ全域を覆うような遺構プランが検出されたため、一部たちわりを施し確認を行った。その



第9図 隆明寺跡(立明寺古墳・礫敷遺構)トレンチ実測図

結果、古墳時代と判断される遺物が出土し、立地から古墳に関わる遺構であると判断された。当初、平坦面の中央付近に位置したため、主体部かと思われたが、遺物の出土状況や内側へ落ち込む形状から周溝であると判断された。よって、墳丘の大部分は、後世の造成や地滑りにより崩壊したものと判断される。古墳の正確な規模は判断できないが、直径8m前後の小規模円墳と推定される。出土遺物は、畿内系の高坏と布留系甕の口縁部であり、時期は、漆町編年10～11群墳と考えられる。1基のみの確認であり、古墳か古墳群かは断定できなかった。

小松市東部の丘陵縁部に形成された河田山・埴田地域古墳群は、能美地域の有力古墳群である能美古墳群の支群の一つであり、古墳時代を通じてほぼ継続的に営まれている。本古墳についても、その中に含まれると考えられる。近接地には、埴田後山古墳群やブッシュヤマ古墳群が所在するが、両者とも後期古墳であり、中期初頭の古墳の立地では南限である。これまで古墳未確認の地区においての発見であり、当該期の古墳群と在地勢力との関係を検討する上で重要な発見といえる。

## (2) 礎敷遺構 (トレンチA7a～c)

古墳検出地点からさらに南側の地点から、平坦な石を敷いたような遺構が検出されている。調査地近郊は凝灰岩の産出地であることから、山石とも考えられた。しかし、他の調査員にも実見してもらい協議した結果、地元の凝灰岩とは異なると判断されたため、礎敷遺構と認定するに至った。丘陵先端のやや塚状になった部分に施されており、何らかの標識と考えられる。遺物が全く出土しなかったため、時期は判断できない。

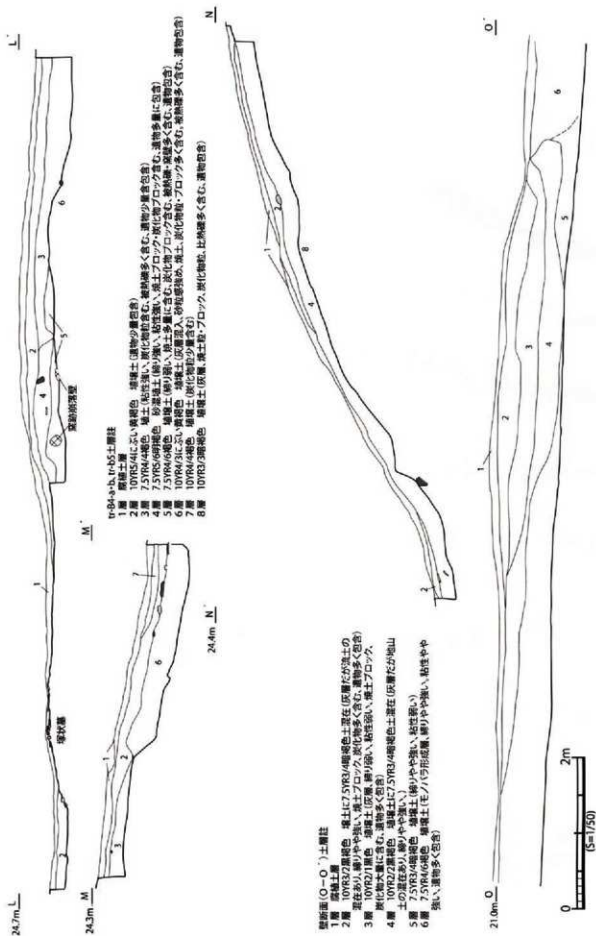
遺構の形態から、近接する宮の奥経塚で見つかった遺構と類似している可能性がある。宮の奥経塚は3基の塚状遺構があり、土師器・須恵器や用途不明鉄器が出土したもので、「経塚」と呼称されているが確証はない。内部に石を組み合わせて作った石棺状の施設に盛土したもので、特に2号遺構は、表面に敷石がみられることから、隆明寺跡で見つかったものに類似しているといえる。報告では、その石を「スレート石」と表現しており、当遺跡の石材と共通する可能性がある。また、宮の奥経塚からは中世の梅花飛鳥鏡も出土しており、両者とも古代～中世にかけての宗教遺跡である可能性が想定される。

## 4. 立明寺窯跡地区

丘陵部の南西側斜面で、削られて崖面となっている箇所、多量の土器や瓦が露出しているのが発見された。その中には多量の瓦が含まれていることから、建物の存在が想定された。しかし、7世紀末頃(田嶋編年Ⅱ2期)の須恵器を多く含んでいることが判明し、多量の灰や焼土、窯壁の破片や焼台が出土し、「灰原」や「モノバラ」であることが確認された。よって、窯跡本体がその上方斜面に存在することが想定されたため、多くのトレンチを設定して確認作業を行った。しかし、同地区において上位に中世墓群が確認され、窯体確認はその破壊につながるため、調査を断念している。

灰層はトレンチB4a・B5・C5・C6・C10・C14から確認されおり、約15mの範囲に渡っている。モノバラ層はトレンチB4a-b・C4で確認され、灰層部分を含めて約30mの範囲に渡っている。モノバラ層では、瓦片などの遺物が水平に挟まれていることが多く、中世幕段階の造成で形成されたものではないと考える。灰層は、最下位のO-O'間で3層確認され、深さ約60cmの厚い層を形成しており、複数回の採棄が考えられる。また、離れた地点で2箇所形成されていることから、窯本体が2基存在する可能性も考えられる。その位置は、トレンチC1・C3の下の可能性が高い。

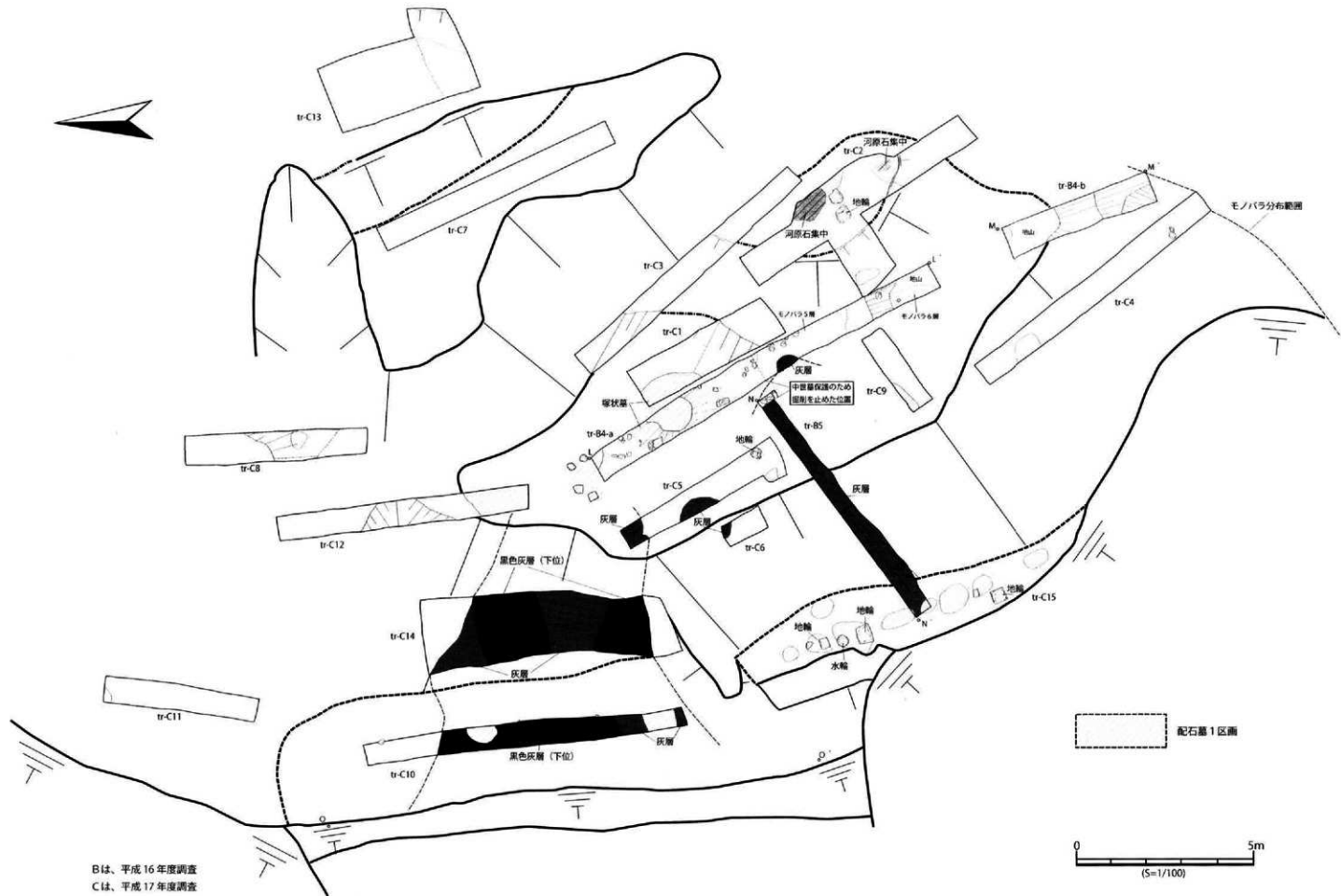
トレンチB5から、現況のテラス自体は中世幕の造成に伴うものと判断されるが、トレンチB4a南端からB4b北端にかけてみられる地山テラス面については、窯跡に伴うものと判断される。原料となる陶土に関しても、前述のとおり現代でも採取されていることから、古代においても付近で採取さ



- tr-B4-a-b, tr-B5土層註
- 1層 腐植土層
  - 2層 10YR5/4Lこぶい黄褐色 腐植土(遺物少量含む)
  - 3層 10YR6/4褐色 腐土(粘性強い、炭化物多く含む、遺物少量含む)
  - 4層 7.5YR6/4暗褐色 腐植土(粘性強い、炭化物多く含む、遺物少量含む)
  - 5層 7.5YR6/6暗褐色 腐植土(粘性強い、炭化物多く含む、遺物少量含む)
  - 6層 10YR4/4暗褐色 腐植土(炭化物少量含む)
  - 7層 10YR4/6暗褐色 腐植土(炭化物少量含む)
  - 8層 10YR3/3暗褐色 腐植土(炭層、炭土層・ブロック、炭化物、比熱多く含む、遺物含む)

- 壁断面(O-O')土層註
- 1層 腐植土層
  - 2層 10YR3/2暗褐色 壁上に7.5YR3/4暗褐色土層在(炭層だが炭土の存在あり、腐りやや強い、炭土・ブロック、炭化物多く含む、遺物多く含む)
  - 3層 10YR2/1暗褐色 堆積土(炭層、腐り強い、粘性強い、炭土・ブロック、炭化物少量含む、遺物多く含む)
  - 4層 土の厚さは多し、腐りやや強い
  - 5層 7.5YR3/4暗褐色 腐植土(腐りやや強い、粘性強い)
  - 6層 7.5YR4/6暗褐色 腐植土(腐りやや強い、粘性やや強い、遺物多く含む)

第10図 立明寺竪断トレンチ断面図



Bは、平成16年度調査  
Cは、平成17年度調査

第11図 立明寺窯跡・立明寺中世墓群トレンチ実測図



れたものと判断する。

新発見の瓦陶兼業窯が発見された意義は大きく、能美地域では未確認である瓦葺建物（白鳳期寺院か？）が存在した可能性が高くなった。瓦窯や瓦陶兼業窯は、その施設のために造営される事例は多く、本窯も特定の供給を担った可能性が高いと考える。

#### 5. 立明寺中世墓群地区

中世墓群は、南西側斜面裾部において2段のテラス面を造成して、配石墓群を形成している。配石墓は、確認数で18基以上存在している。テラス上段は、南北18.5m×東西7mを測り、南東隅部に丘状に小高い部分（トレンチC2）が造られ、南北5m×東西2.5mの平坦面が形成されている。その小丘上には、2基の配石墓が存在し、その内1基には前面に地輪があることから、五輪塔が立てられていたとみられる。また、最上位に位置することから、被葬者集団の上位階層に位置する人物の墓と想定され、2基とも河原石の集中区が確認されている。テラス面には、その小高い部分を取り巻くように、南北方向で、配石墓群が2列程度形成されていたと推定される。その内周側の北寄りの箇所（トレンチB4a・C1）からは、確認長で約350cmを測る塚状墓が造られており、際立った存在である。大きめの礎で外周を囲い、小礫を内部に充填した形態である。また外周部でも地輪が確認されており（トレンチC5）、付近の墓に造立されていた可能性がある。

下段は、削平を受けており、確認長で南北24.5m×東西1.5～3mを測る。ここでは南北方向で一列に配置された配石墓群が形成されており、その内3基において五輪塔の造立が確認されている。1区画の大きさは、1m程度ものが殆どである。

今回の調査では、地輪5基、水輪1基が確認されている。トレンチC15における3基の地輪については、原位置を保っていると判断される。北から30cm×27cm、35cm四方・厚24cm、36cm×37cmである。地輪に挟まれて検出された水輪も、どちらかに伴うものと推察され、径約30cmを測る。これらは、中世墓群を構成する重要な要素であることから、確認調査で取り上げるべきではないと判断し、現地に残した。火輪の存在は不明ではあるが、空風輪は破砕した状態のものが3点あり、採取している。うち2点はトレンチC15の崖面から、もう1点は遊泉寺・クボタB遺跡区域のトレンチB2から出土しており、土取りの影響などを考慮すれば中世墓がさらに面的に拡大する可能性がある。また、凝灰岩の破砕片が多くみられることから、周辺の中世墓でみられる石造物の破壊行為（評価は確定していない）が当墓でもあったのかもしれない。

遺物は、加賀窯産の甕の胴部破片1点が採取されている。以上の資料からは詳細な時期は判断できないが、遅くとも14世紀後半までには成立しており、15世紀前半までは維持されたと考えている。

被葬者は立明寺の関係者が第一に想定されるが、確証はない。しかし、中世墓群と中世寺院がセット関係で存在する事例は多く、近接地に立明寺跡が存在する可能性は高くなったと考えられる。

また、この地点には「しぶら」という旧地名が残っており、「しぶら」は「死むら」の言い換えであるという伝承があり、その地点に中世墓が存在するという興味深い結果となった。一方で、尾根先端部には現在の墓地が形成されており、近年までその焼場が谷奥に所在したことに由来するということも聞いており、「しぶら」が中世まで遡るものかどうかは判断できない。

## 第4節 出土遺物

### 1. はじめに

今回の調査で得られた遺物の殆どは、立明寺窯跡のものであり、その他の遺跡のものは極僅かである。よって、時代は前後するが、立明寺窯跡以外の遺物について最初に報告するものとした。ただし、瓦については、立明寺窯跡のものであることが明らかであることから、まとめて報告を行うものとする。

### 2. 遊泉寺・クボタB遺跡出土遺物 (図12-1~4)

#### (1) トレンチB 2SK02 出土遺物

3は須恵器甕胴部破片である。立明寺窯跡からのものと考えられる。

#### (2) トレンチ覆土内出土遺物

1はロクロ土師器壺B、2はロクロ土師器壺Aか小皿の底部である。1はトレンチB1出土で、やや粗い胎土で浅黄褐色に発色している。黒色処理は施されておらず、10~11世紀代のものと考えられる。2はトレンチB2出土で、精良な胎土を使用しており、底部に回転糸切り痕を確認できる。底部径が4cm以下のため小皿の可能性があり、時期は10世紀後半~11世紀代と考えられる。

4は、須恵器坏B蓋であり、トレンチB3埋土中からの出土である。蓋を裏にして重ねる手法の重ね焼き痕が残る個体である。

### 3. 立明寺古墳出土遺物 (図12-5・6)

#### (1) トレンチA 6出土遺物

周溝とみられる遺構内から出土したもので、5は畿内系の高坏である。坏部の体部たちあがり部分に稜を持ち、内部はハケ調整が施される。脚柱部はハケによるミガキ調整を行った後、軽く横方向にナデつけている。脚部はハの字型で、内面にハケ調整を施しているが、外面は軽いナデ付けの痕跡のみ確認できる。漆町編年10~11群と考えられる。6は布留系の甕口縁部破片である。出土した破片の量は少なく、体部以下の破片は近接する未調査区にあると想定される。器表面が剥離しており、調整は不明である。時期は、高坏と同時期としても矛盾は生じないと考える。

#### 4. 立明寺中世墓群出土遺物 (図12-7~10)

7は、加賀の大甕の胴部下位破片である。降灰により内外面とも自然軸が掛った状態である。胎土は灰白色系の発色をしており、輪積み痕が確認できる。

8~10は、空風輪の破砕片である。8は遊泉寺・クボタB遺跡区域のトレンチB2で出土したものであり、ホゾの部分である。9・10は、トレンチC15前方の崖面から出土したものであり、空風輪の風輪部の破片である。時期の判定は非常に困難ではあるが、空風輪の空部と風部の境の形状から14世紀後半~15世紀前半頃(三浦編年Ⅲ期)とみておきたい。ただし、その部分が明確な溝状を呈するならば、さらに時期が下る可能性がある。

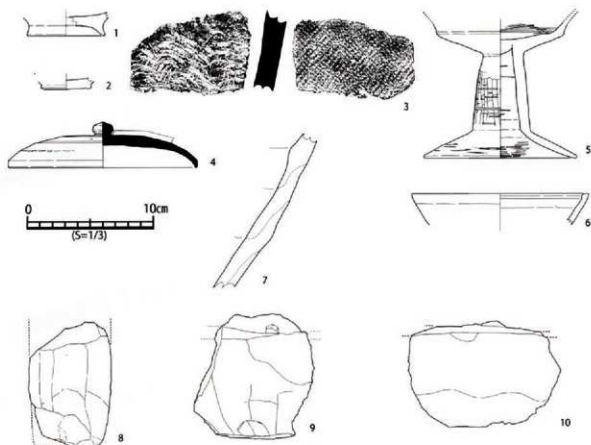
### 5. 立明寺窯跡出土遺物 (図13~22-11~165)

#### (1) はじめに

当該地区出土遺物は、ほぼ須恵器と瓦で占められており、若干の土師器(還元炎焼成されている)が伴う状況である。内訳は、須恵器1958点、土師器18点、瓦204点であり、圧倒的に須恵器が多い。この量比の差については、確認調査であることや失敗率及び一回分の焼成量など多くの問題があるが、瓦生産は特定重要に答えるためのものという理解に基づき、操業回数と捉えておきたい。

前述のとおり窯本体は未調査であり、遺物は全て灰原及びモノバラから出土したものである。須恵





第12図 遊泉寺・クボタB遺跡(1~3)、立明寺古墳(4・5)、立明寺中世墓(7~10) 出土遺物実測図

第2表 出土遺物観察表

番号	出土地点	種別	部種	色調	胎土	形状	口径	高さ	底径 (高台径)	胴部径 (最大幅)	壁部厚	足込 高さ	備考 (口縁部残存率)
1	1b-B1	土師器	埴目	7.5YR6/6 浅黄橙	やや粗	上			5.9				
2	1b-B2	土師器	埴Aや小埴	10YR6/4 浅黄橙	精良	上			4.0				底部筒状本切し横あり
3	1b-B2.5X02	須恵器	黄	2.5Y6/1 黄伝	立明寺(期)	上							内面2.5Y6/1 灰白。H?D6*
4	1b-B3	須恵器	埴目	2.5Y6/3 浅黄	立明寺(期)	上	14.7	3.6					1.8 内面2.5Y6/1 黄伝。8/36
5	1b-A6 (周溝内)	古式土師器	高埴	5Y7/6 橙	良	中			6.0		3.2		胴部径 4.4cm
6	1b-A6 (周溝内)	古式土師器	黄	10YR6/6 黄橙	良	下	14.0				11.2		4/36
7	中世墓地区内伝歌	加賀	大甕?	内丹緑色による自然釉	良	上							胎土 5Y6/1 灰白

注 1 土師器の胎土は、精良・良・やや粗・粗の4段階からの相対的評価。

2 胎土は、焼き締まりの良いものを上として、以下中・下の3段階で判定している。色調は、原則外面を記入。内面等異なる場合は、備考欄に記入。

3 ( ) 内の数値は確率である。

器と瓦では出土傾向が異なっており、遺物の多く出土したトレンチ3カ所を抽出して検討してみた。ただし、恣意的に設定され、幅も長さも一定でないトレンチ内から採取された遺物から導きだされた傾向であることを断っておく。O-O' 壁面(灰層)と、トレンチB5(灰層)やトレンチB4(テラスからモノバラにかかる)について須恵器の出土量をみると、食膳具はO-O' 壁面で152点(全体の約8%)、トレンチB4で45点、トレンチB5で27点であり、貯蔵具はO-O' 壁面で587点(全体の約30%)、トレンチB4で135点、トレンチB5で153点である。よって、O-O' 壁面出土が多く、須恵器の失敗品の多くは灰と供に捨てられたことが分かる。

瓦については、トレンチB4が125点(約61%)と突出して多く、逆に灰層であるO-O' 壁面が16点、トレンチB5が29点と非常に少ない。よって、瓦は須恵器と同じ場所には廃棄せず、その

集中度からトレンチB 4個に意識して廃棄した可能性がある。ある意味灰とは明確に分けられたようで、テラス部分での選別を経ていた可能性も想定される。また、同じ廃棄品ではあるが、須恵器は焼歪み品が多く生焼け品が少ないのに対し、瓦では生焼け品が多いことが特徴である。

胎土については、白色粒が目立ち能美窯産の特徴を示しているが、比較するとやや粗い印象を受け、須恵器食膳具においても大きな白色粒を含むものが認められる。そのなかでも、精良なものとの粗いものに分けることが可能である。

## (2) 須恵器・土師器

出土遺物の殆どを占めており、前述のとおり約4割が灰層部分を調査したトレンチから出土している。廃棄品の中には、坏蓋や甕の破片を焼台に転用したものも定量見つかった。器種構成を把握するにあたり、かえりのある坏蓋と、端部折り曲げの坏蓋については、その形状のみで坏蓋AかBかを識別することができない。また、坏A身についても無蓋と有蓋を器形からは判断できない。よって、蓋と身の数が重複することとなるが、両者を分けずに総量で統計処理を行うこととした。しかし、坏Aと坏Bにおいて、身の量比が約6:1であり、蓋のかえりありと端部折り曲げとの量比が約6:1と対応関係にあることから、両者をA Bに分けることは可能かもしれない。なお、食膳具内の割合については、有蓋器種については、蓋と身で多い方の数を採用すべきだが、上記の理由でこれも総量で示している。以上を前提として、器種構成についてみると、口縁値では食膳具が87.8%と卓越し、貯蔵具は11.3%である。ただし、破片数を採用すると、食膳具29.0%、貯蔵具70.1%となり、逆転してしまう。これは、大型貯蔵具の体部破片数が加算されたことが原因といえ、正しい生産体制を示すものではないと考える。しかし、破片数をあえて提示したのは、量的なデータを示したかったことと、口縁値では高坏や鉢Fといった器種が消えてしまうからである。

食膳具内については、坏蓋（かえりあり）が突出して多く口縁値で52.6%となる。破片数では28.8%が一番多いが、坏A身も24.5%あるため突出感はない。坏蓋（折り曲げ）は、口縁値9.9%（破片数7.0%）と1割程度で、坏B身も口縁値4.8%（破片数5.0%）と少なく、仮に両者を合計しても1割五分程度である。坏G蓋が口縁値で3.9%（破片数0.9%）、坏G身が口縁値1%（破片数0.9%）とさらに低い。仮に帰属不明な坏蓋を除外し坏身の数を採用すると、坏A身が口縁値で63.5%、破片数で47.7%（不明品数排除で65%）となることから、坏A身と多くがそれに伴うと予想される坏蓋（かえりあり）が食膳具生産の主体であったことがいえる。なお、破片数が提示したように、器種判別できなかった破片が定量あることから、割合は補正される可能性があるが、主体器種は変わらないと

第3表 立明寺窯跡出土須恵器器種構成表1（口縁値は口縁部計測法による○/36数値、種内率は各種別内での占有率）

器種名	坏蓋 (かえり)	坏A身	坏蓋 (折り)	坏B身	坏G蓋	坏G身	特殊蓋	蓋A	横瓶	小甕	中甕	大甕	甕	長脚甕
口縁値	596.0	301.0	112.5	54.0	44.5	11.0	15.5	4.0	4.0	18.5	37.5	62.0	8.0	3.5
種内率 (%)	52.6	26.5	9.9	4.8	3.9	1.0	1.4	2.7	2.7	12.7	25.7	55.2	69.8	30.4
種別計	食膳具 1137 87.8%							貯蔵具 146 11.3%			甕 11.5 0.9%			

第4表 立明寺窯跡出土須恵器器種構成表2（種内率は各種別内での占有率）

器種名	坏蓋 (かえり)	坏A身	坏蓋 (折り)	坏B身	坏G蓋	坏G身	特殊蓋	坏蓋 (不明)	坏身 (AD不)	坏身 (BG不)	高坏	鉢F
破片数	160	136	39	28	5	5	3	77	66	5	8	3
種内率 (%)	28.8	24.5	7.0	5.0	0.9	0.9	0.5	13.9	15.5	0.9	1.4	0.5
種別計	食膳具等 555 29.0%											
器種名	瓶A	横瓶	甕類	甕類	小甕	中甕	大甕	甕類	甕	長脚甕		
破片数	14	3	16	17	9	32	606	658	16	2		
種内率 (%)	1.0	0.2	1.2	1.3	0.7	2.4	51.7	41.5	88.9	11.1		
種別計	貯蔵具 1345 70.1%							甕 10 0.9%				

判断される。

貯蔵具では、大甕が口縁値 56.2%、破片数 51.7%と 5 割以上を占め、中甕が口縁値 25.7%（破片数 2.4%）、小甕が口縁値 12.7%（破片数 0.7%）となり、大甕生産を主体としていた可能性がある。瓶類は口縁値と破片数ともに少ない。土師器は、煮炊具が還元炎焼成されたものだが、口縁値と破片数ともに 0.9%存在しており、鍋と長胴釜が確認されている。比率は、鍋が口縁値 69.6%（破片数 88.9%）、長胴釜口縁値 30.4%（破片数 11.1%）となり、鍋が多い状況である。胎土は須恵器と比較すると、微砂粒が多く含まれており、焼締りも軽質感が感じられるものである。単発的な生産であった可能性が高い。

操業時期については、かえり付きの坏蓋が主体を占める状況などから、田嶋編年Ⅱ 2 期（7 世紀第 4 四半期）の範疇に収まるものと理解している。

#### a. 坏蓋

坏蓋（かえりあり）をみると、総じてかえりは小型化しており、天井部には降灰により痕跡を確認できなかった 11・12・18・19 以外は全てヘラケズリ調整が施されている。器形は、ほぼ平らな天井部を持つ皿型が基本であるが、19 のような緩やかに湾曲する浅坑型や直線的に開き見込みの浅い 18 もある。つまみは、宝珠つまみを基本とするが、15 のようなやや扁平化したものが 1 点認められた。体部は直線的なものが多いが、中で外側にやや屈曲する 11・17 も存在する。法量は、口径 15.0～16.5cm 程度の大と、12cm 代に中心があり 12.2～13.2cm 程度の小が存在している。加えて、14.5cm と大小の中間の法量を示す中（14）も存在している。比率は、小が約 7 割を占め、主体となっている。重ね焼き痕については、13 と 15 において蓋と身を逆位に積み重ねた時にできる痕跡（Ⅱ類）が確認されている。なお、12 と 19 は、焼台に転用されたもので、甕片や窯土が付着している。

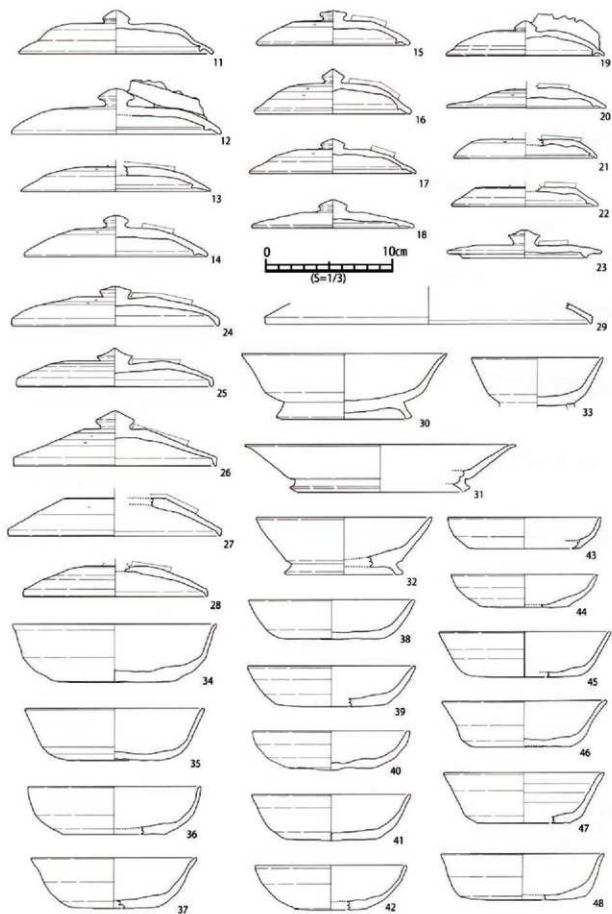
21・22 は、口径 11.5 前後を測るもので、薄手で作りが丁寧であることから、坏 G 蓋と判断した。胎土も比較的精良なものを使用し、焼成状態も良い仕上がりにある。これらは、蓋と身が正位で焼かれたようである。

23 は、平な天井部を持つ蓋である。平になったのは焼歪みの可能性もあるが、坏 A 蓋には見られない精緻な造りのつまみが付くことから、特殊蓋としておきたい。

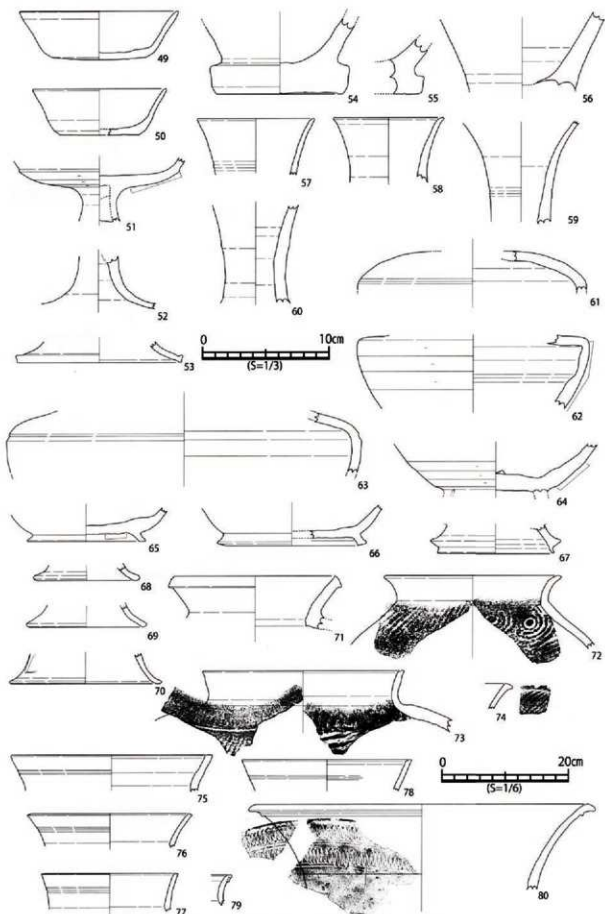
坏蓋（折り曲げ）は、天井部のヘラケズリ調整が認められ、大型の宝珠つまみが付いており、端部の折り曲げがシャープである。皿型とみられる 24・25 や、浅坑型である 27 の他に、平らな狭い天井部を持ちハの字に体部が開く山笠型の器形（26・27）が存在している。法量では、口径 15.2～16.7 cm の大と、一回り小さい 14.4cm の小が存在しており、主体は大型品にあるようである。大においては、比較的広く天井部にケズリ調整が施されている。重ね焼き痕は、山笠型以外の器形（24・25・28）において、蓋と身を正位に重ねたものを積み重ねるⅠ類の痕跡が確認できる。また、口径 20cm を超える 29 などの特大品も確認されている。

#### b. 坏身

高台の付く坏 B 身は、体部が外傾して開く器形のみを確認している。高台はしっかりと張り出しており、Ⅱ 2 期の特徴といえる。法量は、口径 20cm を超える特大（31）、16.2cm の大（30）、13.8cm の中（32）、10.3cm の小（33）が存在している。それぞれ坏蓋（折り曲げ）の各法量と対応関係にあるようだ。ただし、小に関しては、対応する法量の蓋がなく無蓋器種である可能性が高い。また、特大とした 31 については、焼き歪みの激しい小片から復元したものであるため、器形及び口径は正確さに欠ける可能性があり、反転部分は参考程度にして頂きたい。比率は、身においても大が主体であり、約 8 割を占める。



第13図 立明寺窯跡 出土遺物実測図



第14圖 立明寺窯跡 出土遺物実測図(75~80は1/6)

無台の坏A身は、丸みを帯びた腰部から直線的及びやや内湾気味に立ちあがる器形Ⅰ類と、底部から直に体部が外傾ないしやや外反気味に立ちあがり箱型を呈する器形Ⅱ類に二分される。法量は、Ⅰ類が口径16cm程度の大(34)、13.5～14cm程度の中(35・36)、11.5～13cm程度の小(37～44)に大別される。小においては、器高3.5～4.0cmの深身(37・41・42)、3.1～3.3cmの浅身(38～40)、2.5cm前後の特浅(43・44)に細分可能である。Ⅱ類は、口径12.5～13.5cmに集中している。量的には、大は約5%程度で、ほとんどが中小法量といえる。有蓋・無蓋については、Ⅰ類・Ⅱ類とも内面の降灰状況をほぼ確認できず、積極的に判断できない。36・44は、降灰が認められるため、無蓋の可能性はある。ただし、法量分化しているのはⅠ類であり、箱型といえども1法量のⅡ類のみ有蓋とはいえない状況である。この点は、塊形がほぼ無蓋と判断される湯屋壺とは異なる状況といえる。

50は、口径10.4cmと法量がさらに小さく、坏A身に比して造りが精緻であることから、坏G身としたものである。坏G蓋と対応関係にあると考える。

#### c. 高坏

高坏は、体部の立ち上がり基部に稜を持つタイプである。破片で8点出土しているが、少なくとも3個体は存在する。51・52は、外面全面が降灰により緑色を呈し、脚柱部の最も細い部分で51は26cm、52は32cmを測る。51は、外底面を広範囲にケズリ調整を行っている。また、脚柱部内面にも灰を被っており、自然軸及び灰溜まりが存在する。よって、逆位で焼成された可能性が高い。坏部には薬等を挟み込んだとみられる火色が筋状に残っている。見込み部は、規則性のない不整ナデにより調整されている。一方で52は、脚柱部下位から脚部にかけての破片であるが、外面は全面自然軸に覆われているが、脚柱部内面は灰を全く被っていない状態である。また、脚部片の53は、先端に面取りを施すタイプであるが、やや酸化気味に焼きあがっており、全く降灰していない。3者とも焼成位置が異なったことが考えられる。

#### d. 鉢F

破片数で3点出土している。54・55は底部部分で円盤状を呈するが、厚さに約1cmの差がある。外面はほぼ全面が降灰により自然軸化しているが、内面に降灰は見られない。外底面に刺突痕は確認できない。56は体部破片で、酸化焼成となったものである。

#### e. 瓶A・瓶類

57～60は口縁部及び頸部破片であり、口径は9cm前後に復元される。57と59には、外面に2条の沈線が施されている。なお、58・59は、内面に降灰しており自然軸化している。61～63は、肩部付近の破片である。61・62は、肩部径が18cm程度に復元され、62には体部上半にケズリ調整が施されている。63は肩部に1条沈線を施すもので、肩部径28cmと大きく復元された。64は底部付近の破片で、体部下位にケズリ調整が施されている。また、底部痕跡から、3方向から透かしを入れた高台を持つことが確認されている。65・66は、短い高台を持つものであるが、立ちあがり部分の丸さから瓶類の底部と判断したものである。67～70は瓶類の高台とみられ、67は断面三角形に肥厚した部分の内側を突出させる形状であり、70は、大きな透かしが施されている。

#### f. 横瓶

形状及び口径が12.4cmに復元されることから、横瓶と判断した。口縁部内面は、降灰している。

#### g. 小甕

口径が小さいが、外面に平行線文タタキ、内面に同心円文あて具が施されているものを小甕とした。口縁部が外反気味に立ちあがり、端部を丸く収める72と直線的に立ちあがる73が存在している。72は、頸部より上まで平行線文叩きが及んでいる。74は小片だが、同様に口縁部付近にまで平行線

文タキが施されていることから、小甕と判断した。また、酸化焼成となっていて、焼成もやや甘い。

#### h. 中甕

直線的に立ちあがる口縁部で、中位に2条の沈線を施すもの(75～78)が主体だが、79のような玉縁口縁のものも口縁値で17%程度存在する。口径は、21.5～31.8cmに復元される。そのなかで口径30cmを超える75のみ、器内を厚く成形しており、内外面とも降灰し自然釉化している。なお、酸化焼成となっている78のみに、口縁部内面にカキメ調整が施されていた。また、沈線も他のものと異なり、2条の隙間を空けずにひかれている。沈線を2条施すという規範は存在するが、その間隔は個体によって異なっている。

#### i. 大甕

口径36.8cmから66cmという特大のものまで、様々な大きさのものが確認されている。沈線によって区画された範囲に上下2段に渡って波状文を施すものが主体である。ただし、84・85のように、酸化焼成となった個体であるが、ヘラによる斜めの刻み線を施したのも確認されている。なお、85については、酸化焼成といえども硬質に焼き締まっており、上段には刻み線を入れる前にカキメ調整が施されている。偶然かもしれないが、還元炎焼成品のなかには、このような文様を施す個体は確認されていない。82は、焼け歪みの激しいもので、その影響で反り返ったものである。

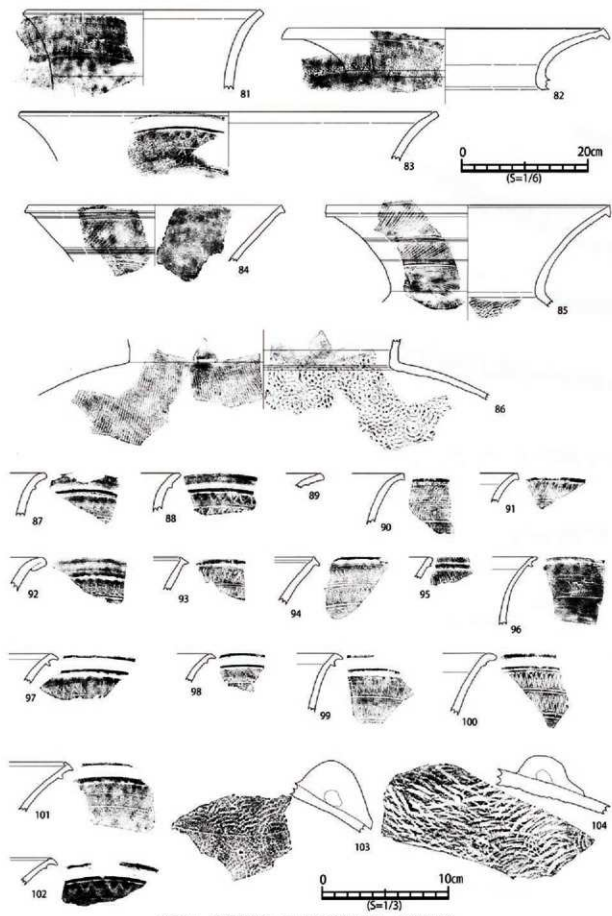
大甕は、口縁部形態により細分可能であり、8型式が確認できる。A類は、凸帯等を施さずにそのまま口縁部を取めるもので、81・83が該当する。B類は、口縁部部はそのまま取めるが、凸帯のみを施すもので、87～89が該当する。端部を丸く取めるB1類(87・88)と面を形成するB2類(89)に細分できる。比較的振幅の狭い波状文が施される。C類は口縁部部を断面三角形に突出させるもので、90・91が該当し、比較的振幅の大きい波状文が施される。前述のヘラ刻み文の84・85も、この型式に当てはまると考える。D類は、口縁部部を折り返し玉縁状に仕上げるもので、確認したのは92の1点のみである。E類は、口縁部部を内外両側へT字状に引き出すもので、93・94が該当する。F類は、肥厚した口縁部部に太い沈線を施すことにより凸帯風に見えるもので、95が該当する。同種の別個体の破片がもう一点確認されており、鋸歯文のような鋭角な波状文が共通して施されている。G類は、口縁部部を上下2段に外側に引き出すものであり、Fの字状を呈する。80・95～100が該当する。96のような薄いものや、100のような厚いものもあり、細分可能である。また、98のような振幅の小さい波状文を施すものもみられる。H類は、G類とE類が組み合わせられたような形態で、82・101・102が該当する。特に、101・102は内側の突出の厚みは異なるが、両者とも粘土を継ぎ足した痕跡が確認される。出土点数からいえば、G類が最も多く主体であったといえよう。

#### j. その他の甕

103・104は、把手付き甕の把手部分である。分厚い紐状の103と、おそらく切り揃えを行ったとみられる薄手の104が確認される。105・106は甕の胴部破片であるが、105はDc類(木目が同心縁に關係なく平行線であるもの)の同心円文あて具が内側に施されたものである。Dc類は、8世紀中頃から主体となる文様であり、古い例の一つである(望月精司氏教示)。106は、同心円文あて具(Da類)の上から、平行線文あて具が施されたものである。平行線文あて具は、九州では7世紀前半の例が確認されているが、加賀では8世紀後半～末以降に使用例が確認されるものだろう。当該破片はⅡ2期のものである可能性が高く、これまでより1世紀程度古い例になるそうである(望月精司氏教示)。

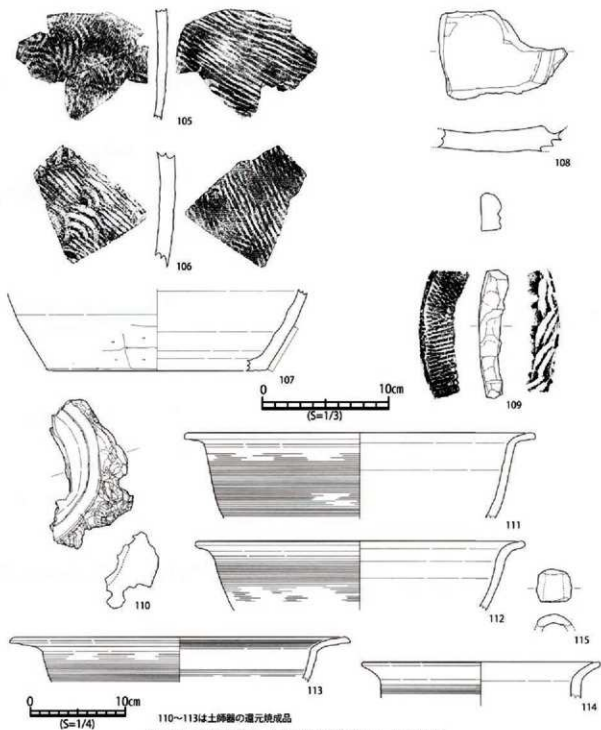
#### k. 特種品・焼台等

107は、鉢型に開く体部を持った破片で、体部下位にブロック毎のヘラケズリが横方向に施されて



第15図 立明寺窯跡 出土遺物実測図(81~102は1/6)





110～113は土師器の還元焼成品

第16図 立明寺窯跡 出土遺物実測図(111～114は1/4)

いる。胎土から中世陶器ではなく須恵器だと認定できるが、器種は特定できない。108は、無堤有溝式の円面碗の可能性のある破片である。当該窯は、後述するように瓦生産も行っていることから、識字層の需要に答えたとしても矛盾しないと考える。同時期頃の無堤有溝式の円面碗は、弓波庵寺跡から1点出土している。109は、叩き整形する器種において、口縁部接合時に切った破片である。切る時に指で押さえた痕跡が、内弧側に残っている。内部にそのまま残されたという意見や、意図的に焼成して窯道具として使用したとの意見(望月2004)もあるが、当窯のものは、酸化焼成で焼成もや

や甘く、灰かぶりや産着痕も見られないことから、どちらともいえない。110は、坏蓋（かえりあり）を転用した焼台である。粘土塊に埋められているが、坏内面は全く灰かぶり等しおらず、汚れのない状態である。正位に伏せた状態で使用したと考えられる。

### 1. 土師器

111～114は、還元炎焼成された土師器煮炊具である。111～113は口径34.7～37.0cm測り、鍋と考えられる。口縁部が狭い111・112と、広い113に大別され、両者とも外面にカキメ調整が施されている。113は内面にもカキメ調整が施されている。実測はしていないが、体部下半の破片において外面平行線文タタキと内面同心円文あて具痕のあるものを確認している。114は、口径25.0cmに復元されることから長胴釜と考えられる。体部外面にカキメ調整が施されている。115は、円筒形の土製品で、土鍾と考えられる。酸化焼成品であり、窯跡に伴うものと考えておきたい。

### (3) 瓦

瓦は破片数で204点出土しており、白色を呈する生焼け品が約85%と圧倒的に多く、還元炎で焼結した破片は約15%と少ない。出土地点は前述のとおり、6割がテラス面からモノバラにかけてのトレンチB4から出土している。ただし、須恵器が多量に含まれる灰層内からも定量出土している。胎土は、白色の粒（グズ石という表現もある）が多く含まれているやや粗いものであり、1cm大近い大きな粒も含んでいる。須恵器にも、この傾向を持つ胎土が確認されている。

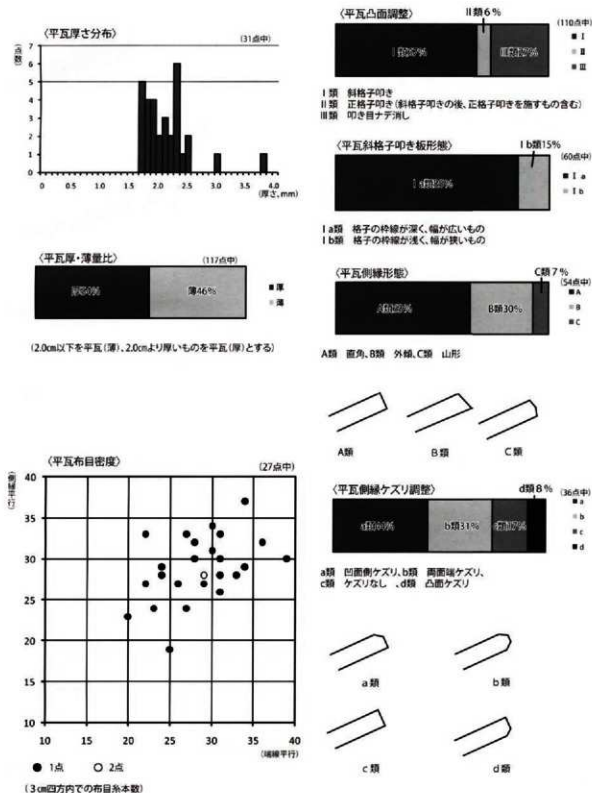
瓦の種類は、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬘斗瓦の4種類であり、軒丸瓦は確認されていない。その内訳は表のとおりである。破片数及び割数とも平瓦が約8割と突出して多く、丸瓦が1割5分程度あり、3～4%の軒平瓦が伴う状況である。ただし、鬘斗瓦は破片では峻別することができず、平瓦の数値にその分も含まれていることを考慮しなければならない。一方で、焼結品の割合をみると、平瓦が約10%しか存在しないのに対し、丸瓦では約43%存在することから、製品としての失敗率の差も反映されているのではないかと考える。なお、普通の平瓦と鬘斗瓦を分けて生産していることから、総瓦并用に生産された可能性も考慮する必要があるとのことである（上原真人氏教示）。

#### a. 軒平瓦

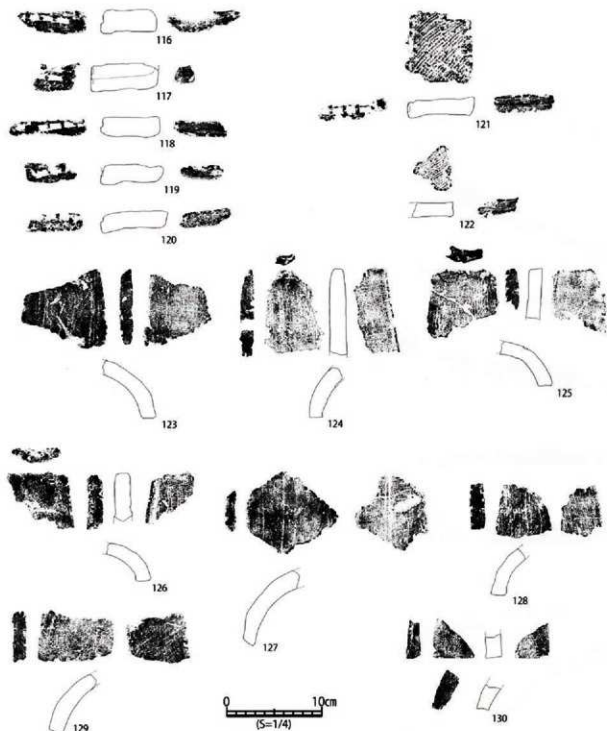
軒平瓦は、全て段頸式であり、その本体から剥離した頸の部分のみが出土している。よって、平瓦の広端部凸面に粘土帯を貼り付けて整形した後、文様を押印する技法で制作されたものである。粘土帯の幅は、6cm前後の116・118と、6.6cmの119、7cm前後の117・120・121がある。粘土1層分の厚みは、1.4cm～2.4cm程度まで様々である。文様帯が2段目まで確認できる117は、2.7cmを測るもので、2層の粘土帯の積み上げが確認される。よって、平瓦本体まで含めると、都合3層の粘土で端面を整形したと考えられる。また、厚い方の粘土帯では、2層による整形の場合もあったのであろう。仮に117に、平瓦の平均厚2.1cmを足すと、4.6cmの幅に復元できる。以上から、文様は上中下3段に長方形を目的字状に配置し、複数列連結させたスタンプ文であることが分かる。それを瓦当部に数単位、円弧状に押し文様全体を形成していたと考えられる。文様の大きさは、長方形1単位の大きさを0.9～1.4cm×0.5cmであり、間の溝は0.3cmを測る。上下幅は、0.5cm×3+0.3cm×2で2.1cmとなる。左右の幅については、同范の可能性のある118と121から復元すれば、4列である可能性が考えられる。また、瓦頭部を正面にして左から短いものと長いものを交互に配列するという法則性がある。よって、0.9cm+1.1cm+1.0cm+1.3cm+0.3cm×3で、5.2cmとなる。当然、収縮の問題があり、1～2割程度大きなものであったことが予想される。なお、平瓦との接合面については、121・122にヘラによりカキメを付けて接着強度を増していたことがわかる。ただし、それ以外の破片からは、明確な痕跡が確認できないことから、主流の技法であったかどうかは分からない。凸面側は、一度格子目の叩き

第5表 出土瓦種別構成表

	軒平瓦		丸瓦		平瓦 (契斗含む)		合計
破片数	6	3%	28	14%	170	83%	204
開数 (○/4)	1	4%	4	17%	19	79%	24



第17図 出土平瓦計測データ



第18図 立明寺発跡 出土遺物実測図

板で叩き締めた後、ヨコナデによるナデ消しを行い平滑に仕上げたようで、119・120には消し残った痕跡が確認できる。

瓦当文様の系譜については、尾張から三河地域で展開したもので、畿内では少ないようだ。重弧文が原型で、押し止めたものが変化しハンコになったものと考えられている。医王寺庵寺（愛知県宝飯郡小坂井町）、尾張元興寺（名古屋市中区正木町）、寺部庵寺（愛知県幡豆郡幡豆町）が挙げられる（以上、上原真人氏教示）。

## b. 丸瓦

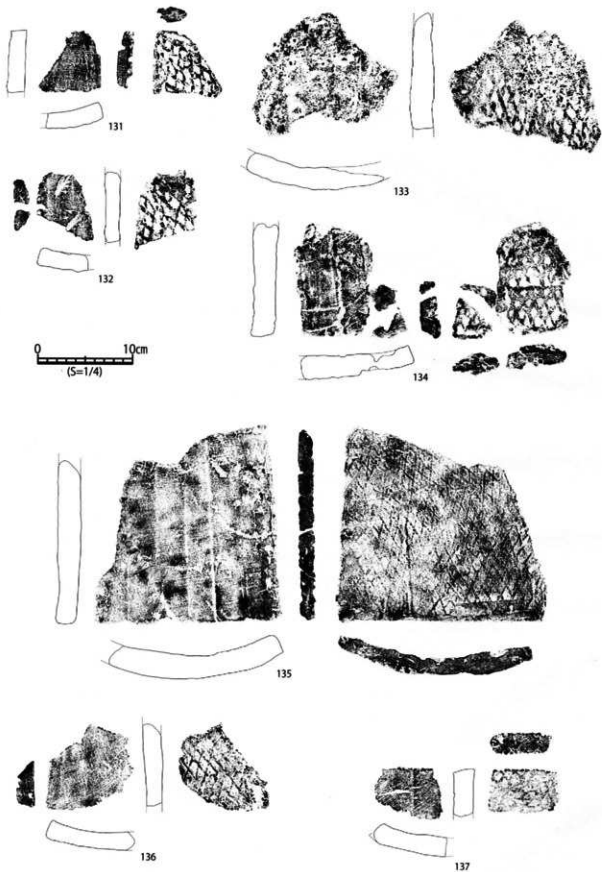
出土点数は少なく、全形に分かる資料は存在しないため、法量は不明である。ただし、狭端部の破片(124・125・126)があるため、行基式であったことが分かる。厚みは、1.5～1.8cmの間に集中しており、生焼け品の127が1.8cmで最も厚く、平瓦(薄)が焼き締まった厚さに該当する。側面は、切りとったままと考えられ、側縁部に調整は施されていない。凹面には、全てに布目痕跡が確認でき、平瓦よりもやや密なものを使用しているようである。凸面は、125・127に細い縄目叩きの痕跡が確認でき、その後ハケによりナデつけるような調整(ケズリまで強くない感じがする)を縦方向に施し、縄目を消したようである。同じ行基式であるが、横方向にカキメ調整を行う湯屋窯と調整方法が異なっている。

## c. 平瓦・鬘斗瓦

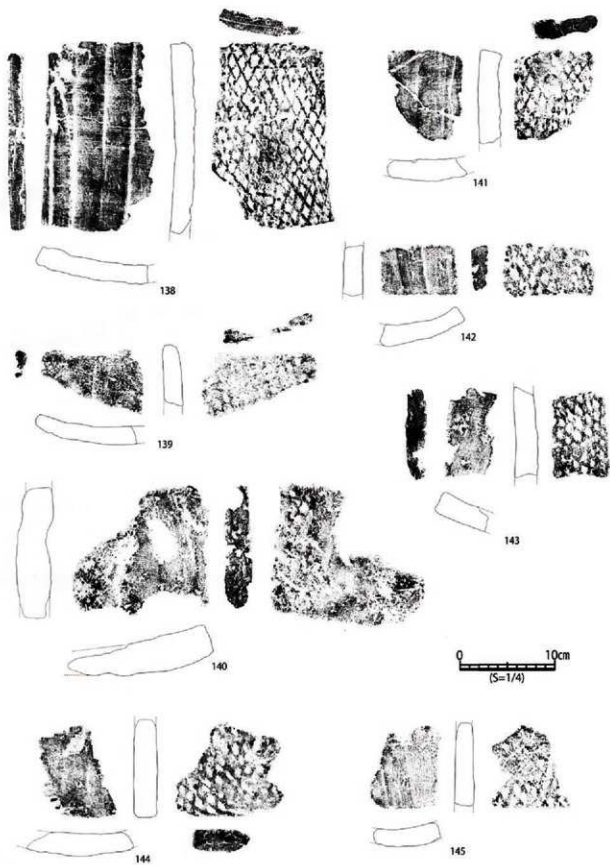
平瓦・鬘斗瓦は、全形に分かる資料は出土しておらず、法量については明確にできない。平瓦で最も残りの良い135でみると、残存長20.8cm、広端残存幅21.0cmである。参考までに湯屋窯製品をみると、全長平均39.3cm、広端幅平均28.3cm、狭端部平均23.9cmである。製作方法は桶巻き作りであり、桶の直径は135より広端部で45cmに復元される。生焼け品であるが、乾燥による収縮を考慮し、1割増しにすると49.5cmとなる。非常に粗い計算であるが、45～50cm程度の桶であったと考えられる。また、凹面に残る板の痕跡から、桶にあまり角度は付いておらず、円筒形に近いものだったと考えられる(上原真人氏教示)。

厚さは、1.7～2.5cmまでに集中しており、一部140や149のような特厚品が存在する。両者とも生焼け品だが、前述のとおり出土平瓦の9割が生焼け品であることや、仮に1割補正しても集中帯には届かないことから、生焼けだからということだけで厚いわけではないようだ。通常の平瓦は、1.7cmと2.3cmにピークがあり、薄手と厚手の製品が存在したようである。分布の谷間にあたる2.0cmを境にして分類すると、厚が54%、薄が46%となりやや薄手が少ない状況だが、ほぼ拮抗しているといえる。布目密度については、劣化により広がったものも想定されるが、端線平行で40本以上確認できる湯屋窯製品より質が低下しているようである。凸面調整は、斜格子文を施した叩き板で全面叩き締めるもの(I類)が主体で、67%を占める。次いで、ナデ調整で叩き目を残さないもの(Ⅲ類)が27%存在する。Ⅲ類は、155のように斜格子叩き目が消し残ったものが存在するため、基本的には叩き締めた後に、ナデ調整を行ったものと理解している。ただし、破片のみであることから、格子叩きが全面か部分的かは判断できず、格子叩きをしなかったものも存在する可能性は否定できない。加えて、6%程度だが正格子の叩き板(Ⅱ類)で叩き締められた個体も確認されている。そのなかで151・152のように、斜格子叩き(I a類)の後に正格子叩きが施されたものがあり、両者が共有されていた状況も確認できる。なお、湯屋窯のように、叩き調整の前にカキメ調整が施される個体は確認されおらず、丸瓦と同様に製作技法の相違が認められる。また、斜格子叩き目板は、格子の枠線が深く幅が広いもの(I a類)と、格子の枠線が浅く幅が狭いもの(I b類)の2系統が存在している。比率は、I a類が85%と主体を占め、I b類は15%であるが定量存在する。

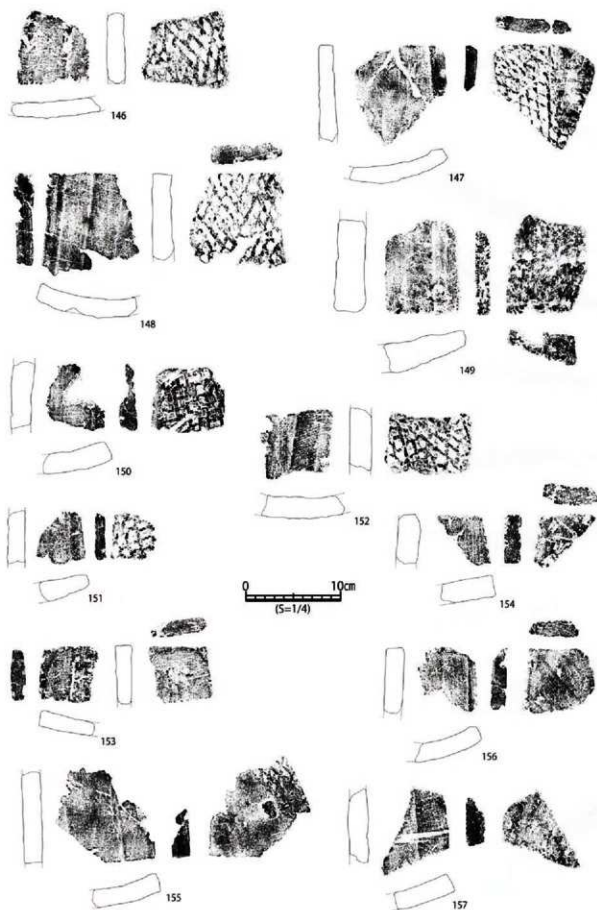
側縁部の切り離し形態については、直角のもの(A類)が最も多く63%を占める。ついで、外傾(B類)が30%を占めるが、155のような山形を呈するものが7%存在する。山形については、調整とすべきかもしれないが、さらにケズリ調整を加えるものが認められることから、形態分類に加えたものである。その、ケズリ調整については、凹面ケズリ(a類)が最も多く44%を占めるが、ケズリをしないもの(c類)も17%と定量存在している。ただし、側縁ケズリ調整については、ケズリの幅や角度(深さ)などにより、細分可能である。



第19図 立明寺窯跡 出土遺物実測図

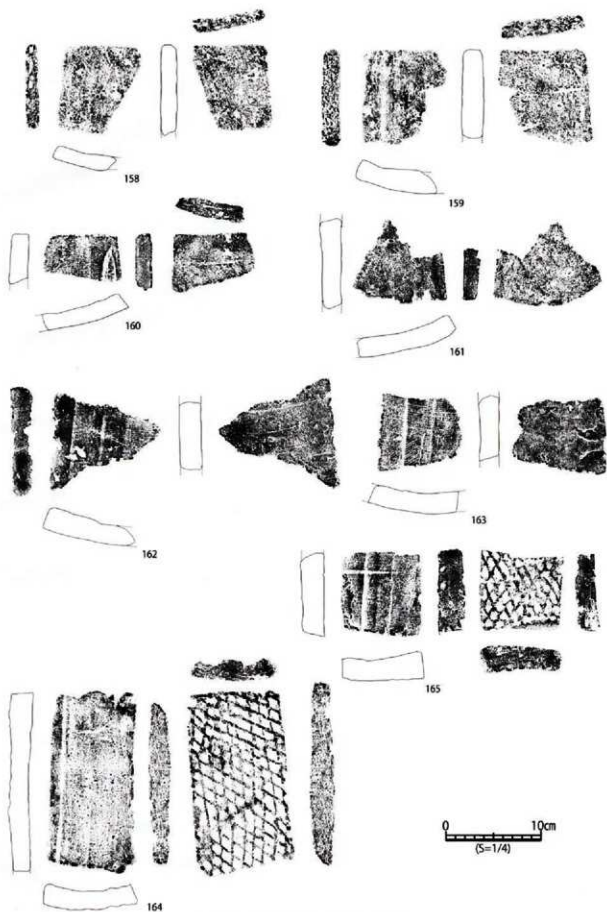


第20図 立明寺麻跡 出土遺物実測図



第21図 立明寺窯跡 出土遺物実測図





第22図 立明寺窯跡 出土遺物実測図

131～134は、遊泉寺・クボタB遺跡地区から出土したものである。131～133がトレンチB2、134がトレンチB1SK-1出土である。トレンチB2のものは、モノバラ域に近いことから流入の可能性が考えられる。134については、やや離れた平坦面上の遺構出土であり、工房等が存在した可能性も想起される。他は全て立明寺窯跡区域内からの出土で、135～137は叩き板I b類の製品である。138～148は叩き板I a類の製品であり、147・148には2度押しの痕跡が認められる。149～152は叩き板II類の製品である。153～163はナデ調整ないし叩き目ナデ消し調整の製品である。

駝斗瓦は、それと確認できた資料は2点のみであり、全形に分かる資料はない。164は生焼け品で、幅9.9cm、厚さ2.2cm、残存長18.9cmを測る。165は焼結品で、幅8.5cm、厚さ2.8cm、残存長8.7cmである。両者とも、凹面には桶の痕跡と布目痕があり、凸面には格子叩きが施されていて、通常の平瓦を切って製作したものと考えられる。破片の湾曲から、164は中間の部分、165は左側端部と推察され、平瓦の1/3程度の大きさと考えられる。幅の数値を3倍すると、164が29.7cm、165が25.5cmとなる。両者の焼締り程度の関係から、約15%の収縮率をみる事ができる。非常に粗い計算ではあるが、参考程度にはなろう。なお、165は焼結品にもかかわらず、厚みのある製品となっている。平瓦における厚さ3cm以上(生焼け状態)の特厚品に該当するといえ、稀に存在する特厚品は駝斗瓦生産のためのもかもしれない。ただし、通常厚の164が存在し、特厚平瓦自体も少ないことから、通常の平瓦を加工する場合が主体であったと考えている。

#### d. 瓦の評価について

第一に白鳳期段階における軒平瓦の生産が確認されたことが特筆される。南加賀では、これまで畿内系の重弧文の軒平瓦が、片山津中学校裏遺跡(瓦窯?)及び弓波廃寺跡で採取されたのみであった。また、その文様が尾張系であり、系譜が異なる点も注目される。ただし、軒平瓦の文様が尾張系である以外は、畿内直系の瓦といえる。また、生産時期については、田嶋編年Ⅱ2期の範疇に収まるものと考えられ、湯屋窯の古段階(瓦稼業開始は2段階から)より少し新しい時期に位置付け可能だそうである(上原真人氏教示)。瓦生産では、調整方法などに異なる手法みられ、湯屋窯とは異なる系譜の導入であった可能性が考えられる。

また、1点のみだが、明瞭に粘土紐積み上げ痕跡が確認できる平瓦が存在している。石川県内で同技法による平瓦は、加賀市宮地廃寺出土瓦の一部に確認されるのみだそう。粘土紐はかなり細く2cm程度であり、粘土板と粘土紐技法が併存する可能性が指摘されている。ただし、渤海など半島北部では通常みられる技法であり、土器づくり工人の間々までは言及できない(木立雅朗氏教示)。実際、当窯製品においても、同心円文である器具など土器と共通した痕跡は確認できなかった。

## 第5節 小結

寺院跡に関する調査結果としては、周辺から平安時代後期～中世の遺物が少量出土したことのみにあつた。しかし、当該時期の遺物が存在することは、この地で何らかの活動があつたことを想起させるものである。また、中世墓の存在は、この地周辺に寺院跡があつた可能性を強くするものといえる。ただし、遊泉寺・クボタB遺跡の広い平坦面区域にはその痕跡を確認できておらず、寺院本体については、別の地点を考えざるを得ない。

加えて、寺院跡に対し、これまでの採取された瓦や須恵器片によって漠然と10世紀以降の瓦葺寺院と捉えられていた認識を、上記窯跡の発見によって是正することができた点は大きな成果である。今回発見された瓦筒兼業窯は、近在する十九堂山遺跡(因分寺推定地)より出土している格子目叩き

を施された平瓦との関連も考えられ、当該時期では現存する数少ない瓦を生産した窯跡であることから、小松の古代史を解明する上で非常に重要な遺跡である。

また、梯川を下流に約3km下った位置にある千代オオキダ遺跡から、白鳳期とみられる瓦が少量出土している。これまで加賀地方で類例のない瓦当文様が施された軒丸瓦片が出土したことで注目されたものである。報告では濃淡と東海～東国地方系譜としてしまったが、上原真人氏の御教示によれば、畿内山城極原廃寺や河内高井田廃寺（鳥坂寺）などで展開した重弁文軒丸瓦の系譜を引くものであるとのことである。ここで改めて訂正させて頂きたい。以上をふまえて当窯跡出土瓦との比較を試みたい。千代オオキダ遺跡の瓦は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦であるが、何れも破片であり全形はわからない。第一に胎土の特徴は、一部を除き両者とも白色粒を含み非常に近似していると考えられる。しかし、軒丸瓦については、当窯跡では確認されていないので胎土以外のことは検討できない。丸瓦についても、千代オオキダ出土品が小片であることから、比較は困難である。軒平瓦片については、段頸式で粘土帯を凸面側に張り付けたものと推察され、当窯跡と同様の目の字スタンプを押したものであり、尾張系とされる当窯跡と共通する可能性が高い。しかし、千代オオキダ遺跡のものは、当窯跡では確認されていない本体の平瓦部分で、目の字最上段が押された箇所であり、頸部分で目の字最下段のみの当窯跡出土品とは文様同定することができない。加えて、目の字1マスの上下幅が5mmである当窯跡出土品に比べ、7mmと大きい点が異なっており、原体が異なる可能性がある。平瓦は、千代オオキダ遺跡出土は斜格子叩きのものと縄目叩きの後タテ方向ナゲ酒し（ケズリ？）する2種類が確認できる。前者については、明らかに斜格子の原体が異なっており、より斜格子の大きさが小さく精緻なつくりである。焼成も黒灰色の瓦質風であり、胎土も精良である。むしろ、前述の十九堂山遺跡出土の平瓦の方が、格子目や焼成状態が類似しており、当窯跡である可能性が高い。後者については、当窯跡出土丸瓦と技法的に共通するが、平瓦では確認できない。仮に千代オオキダ遺跡出土品を丸瓦としても、当窯跡出土丸瓦には確認できない厚みをもつものである。

千代オオキダ遺跡の瓦片との比較結果をみれば、当窯跡産ではなく近似するもう一つの生産地が存在する可能性を考えるべきかもしれない。しかし、トレンチ調査で把握される様相は全てではないため、当窯跡産である可能性が全く消えたわけではない。いずれにせよ能美地域において、江沼勢力や湯屋系とは異なる系譜の瓦生産が7世紀第4四半期に導入されたことは確実であり、その供給先となった白鳳期創建寺院が存在する可能性は一段階高まったといえよう。

隆明寺跡は、寺院本体は不明であったが、古墳・瓦陶兼窯・中世墓といった多岐にわたる内容を持ち、小松の歴史を語る上でその価値は非常に高いといえる。特に、窯跡に関しては、地下レーダー探査などの方策をとり、中世墓を破壊することなく窯体位置を確認する作業が必要であり、今後も適切に保存・活用していくことが重要である。

#### 引用参考文献

- 石川県立埋蔵文化財センター 1986年 『漆町遺跡Ⅰ』
- 北野博司 1988年 『重ね焼きの観察』『辰口西部遺跡群Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 北野博司 1999年 『須恵器貯蔵具の器種分類案』『北陸古代土器研究』第8号北陸古代土器研究会
- 田嶋明人 1988年 『古代編年軸の設定』『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』北陸古代土器研究会
- 辰口町教育委員会 1985 『辰口町湯屋古窯跡Ⅰ』
- 辰口町教育委員会 2001 『辰口町湯屋古窯跡Ⅲ』
- 出越茂和 1997年 『古代後半期における陶皿食器（後）』『北陸古代土器研究』第7号北陸古代土器研究会
- 望月精司 2004年 『第Ⅵ章飛鳥・奈良・平安時代』『八里向山遺跡群』小松市教育委員会
- 望月精司 2005年 『10世紀の瓦』『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』小松市教育委員会
- 三浦純夫 1986年 『五輪塔の変遷について』『鶴崎遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

第6表 出土須惠器観察表

(単位 cm)

番号	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	口徑	器高 (高台有)	胴径 (最大)	頸径	底径 (口縁部有)	備考
11	b-C15	杯蓋 (赤土)	黒灰	黒	上	15.4	3.4				1.95 内 2.57/7 反白、内面ロナテ
12	O-C 新島原	杯蓋 (赤土)	黒灰	黒	—	16.5	3.6				(1.3) 胎土無味 内 2.57/7 反白、3-36、内面ロナテ 不整ナテ
13	b-C15	杯蓋 (赤土)	2.57/2 反白	赤ヤ箱1	中	15.0					(1.2) 内 2.57/3 反白、10-36、重縁1縁、内面ロ ナテ不整ナテ
14	O-C 新島原	杯蓋 (赤土)	5/7-2 反白	黒	中	14.5	3.3				1.5 5-36、内面ロナテ不整ナテ
15	b-C9	杯蓋 (赤土)	5/7-1 反白	赤ヤ箱1	中	12.2	2.78				1.2 内 5/6-1 反白、3-36、重縁1縁、内面ロナテ 一方ナテ
16	O-C 新島原	杯蓋 (赤土)	黒灰	黒	上	12.3	3.05				1.75 内 5/6-1 反白、10-36、内面ロナテ一方ナ テ
17	b-B4	杯蓋 (赤土)	黒灰	赤ヤ箱1	上	13.2	2.6				1.4 内 1/5-1 反白、1.5-36、内面ロナテ
18	b-C15	杯蓋 (赤土)	黒灰	黒	中	12.8	2.2				0.7 内 2.57/7 反白、3-36、内面ロナテ
19	O-C 新島原	杯蓋 (赤土)	黒灰	黒	—	12.4	2.8				1.3 内 2.57/2 反白、3-36、内面ロナテ
20	O-C 新島原	杯蓋 (赤土)	黒灰	黒	上	12.5					0.8 内 2.57/4 反白、18-36、内面ロナテ
21	b-B4	杯蓋	N4/ 反	黒	上	11.5					(1.2) 内 1/5-1 反白、12-36、重縁1縁、内面ロナ テ
22	b-C9	杯蓋	5/5-1 反	黒	上	11.3					(1.1) 胎土無味、内 7.5/17/4 赤土、15-36、 内面ロナテ
23	O-C 新島原	特殊器	2.5/5-1 黒灰	赤ヤ箱2	中	12.2	2.25				0.5 内 2.57/4 反白、9-36、内面ロナテ
24	O-C 新島原	杯蓋 (赤)	10/17/3 赤土	赤ヤ箱2	—	10.2	3.1				1.6 胎土無味、内 1/4-1 反白、5-36、重縁1縁、内面ロナ テ
25	b-C15	杯蓋 (赤)	2.5/5-1 反	黒	上	15.8	4.3				2.2 内 5/7-1 反白、2-36、重縁1縁、内面ロナテ 一方ナテ
26	O-C 新島原	杯蓋 (赤)	10/17/3 赤土	赤ヤ箱2	上	15.2	3.0				1.0 内 2.57/2 反白、2-36、内面ロナテ不整ナ テ
27	O-C 新島原	杯蓋 (赤)	N4/ 反	黒	上	16.7					内 2.57/3 反白、8-36、内面ロナテ
28	b-C15	杯蓋 (赤)	2.5/5-3 反	黒	上	14.4					(2.0) 3-36、重縁1縁、内面ロナ テ
29	b-C15	杯蓋 (赤)	5/5-1 反	黒	上	25.4					3-36
30	b-C15	杯蓋	5/6-1 反	黒	上	16.2	5.2	10.6			3.7 杯蓋ナテ、内面ロナテ不整ナテ
31	b-C15	杯蓋	5/2/1 ナテ	黒	上	21.4	3.75	(12.2)			内 2.57/1 反白、4-36、内面ロナテ
32	O-C 新島原	杯蓋	10/4-1 反	赤	中	13.9	4.59	6.3			内 2.57/3 反白、0.5-36、内面ロナテ
33	O-C 新島原	杯蓋	2.5/5-2 反	黒	上	10.3		(5.0)			3.1 内面、4/6 杯蓋ロナテ
34	O-C 新島原	杯蓋	5/6-1 反	赤	中	16.0	4.6	6.4			3.6 5-36、内面ロナテ
35	b-C15	杯蓋	7.5/5-1 反	黒	上	14.0	4.15	9.0			(3.4) 内 2.57/7 反白、5.5-36、内面ロナテ、内面ロ ナテ不整ナテ
36	O-C 新島原	杯蓋	N4/ 反	黒	上	12.5	3.75	6.2			5-36、内面ロナテ
37	b-C15	杯蓋	N4/ 反	黒	上	13.0	4.0	7.1			(3.4) 内 5/6-1 反白、5.5-36、内面ロナテ
38	O-C 新島原	杯蓋	2.5/5-3 反	黒	下	13.0	3.1	6.2			2.5 3-36、内面ロナテ
39	b-C11	杯蓋	2.5/5-1 反	赤ヤ箱2	上	13.2	3.25	6.6			(2.6) 7-36、内面ロナテ
40	b-C4	杯蓋	2.5/5-1 反	赤	下	12.2	3.1	7.0			2.55 15-36、内面ロナテ
41	b-C15	杯蓋	5/5-1 反	赤	上	12.5	3.65	7.8			3.15 6.5-36、内面ロナテ
42	O-C 新島原	杯蓋	2.5/7-2 反	黒	上	12.0	3.55	6.6			(3.0) 3-36、内面ロナテ、内面ロナテ一方ナ テ
43	O-C 新島原	杯蓋	2.5/5-1 反	黒	上	12.0	3.5	4.8			6-36、内面ロナテ、内面ロナテ一方ナ テ
44	b-C15	杯蓋	7.5/5-1 反	赤	上	11.5	2.6	7.0			内 2.57/3 反白、7-36、内面ロナテ
45	b-C15	杯蓋	2.5/5-3 赤土	赤	上	13.8	3.6	8.2			胎土無味、内 2.57/2 反白、21-36、内 面ロナテ
46	b-B4	杯蓋	2.5/5-2 反	赤	中	13.0	3.7	7.5			胎土無味、内 7.5/17/4 赤土、16.5-36、 内面ロナテ
47	O-C 新島原	杯蓋	2.5/5-2 反	赤	中	12.6	4.0	7.4			胎土無味、内 7.5/17/4 赤土、16.5-36、 内面ロナテ
48	O-C 新島原	杯蓋	5/4-1 反	赤ヤ箱1	中	12.7	3.65	5.0			(3.7) 10.5-36、胎蓋ヘナテ、内面ロナテ
49	b-B5	杯蓋	5/7-1 反	黒	上	12.5	3.95	7.2			3.25 7-36、内面ロナテ
50	b-C14	杯蓋	2.5/7-2 反	赤	中	10.4	3.65	7.2			(3.2) 11-36、内面ロナテ
51	b-C15	高杯	黒灰	黒	上				2.6		内 1/5-1 反白、2.57/3 反白、内面ロナテ不整 ナテ
52	O-C 新島原	高杯	黒灰	黒	上					3.2	内 10/17/3 赤土、内面シタテ
53	b-B4	高杯	5/4-1 反	赤	中			7.0			胎土無味、内 7.5/17/2 反白、内面ロ ナテ
54	b-C15	鉢	2.5/7-1 反	赤	中		10.0	底厚 2.2			内 10/15-3 赤土
55	b-B3	鉢	2.5/16-1 反	赤	上			底厚 0.9			内 10/15-2 反白
56	b-C15	鉢	7.5/15-6 重縁	赤	中			(13.0)	8.4		胎土無味、内面ロナテ
57	b-C15	鉢	2.5/4-1 反	赤	上	9.2					内 2.5/5-1 反白、3-36
58	O-C 新島原	鉢	2.5/5-2 反	赤	中	8.7					内面、1-36
59	O-C 新島原	鉢	5/6-1 反	赤ヤ箱2	中					(4.7)	内面
60	b-B4	鉢	10/14-1 焼灰	赤	上					4.7	赤ヤ箱胎土、内面ロナテ
61	b-B4	鉢	N4/ 反	赤ヤ箱2	中				18.0		内 5/7-1 反白、内面ロナテ
62	O-C 新島原	鉢	2.5/4-1 反	赤	上				18.4		内 2.5/7-2 反白、外蓋ナテ、内面ロナテ
63	b-B5	底鉢	2.5/6-1 反	赤	上				26.0		内 2.5/7-1 反白、外蓋ナテ、内面ロナテ、ス カシ合
64	b-B4	底鉢	7.5/6-1 反	赤ヤ箱2	上		(9.3)				内 5/7-1 反白、内面ロナテ
65	b-C14	底鉢	5/5-1 反	赤ヤ箱2	上				9.4		内 10/17/4 赤土、胎蓋ナテ、内面不整 ナテ
66	O-C 新島原	底鉢	灰・重土付	赤	上				11.6		内 10/12-1 焼灰、外蓋ナテ、内面ロナテ
67	O-C 新島原	底鉢	5/5-1 反	赤ヤ箱2	上				9.0		内 2.5/7-3 反白、内面ロナテ
68	b-C15	底鉢	2.5/4-1 焼灰	赤	上				8.4		内面ロナテ
69	O-C 新島原	底鉢	黒灰	赤	上				9.5		内面ロナテ
70	b-B5	底鉢	5/6-1 反	赤	上				12.0		内面ロナテ、スカシ合
71	b-B4	樽	2.5/5-1 反	赤	上	12.4			10.4		2-36、内面
72	b-B4	小甕	N4/ 反	赤	上	13.7			12.0		3.3-36、口縁ロナテ、タタキHf/Da
73	O-C 新島原	小甕	5/5-1 反	赤ヤ箱2	中	15.8			15.0		8-36、口縁ロナテ、タタキHf/Da
74	b-C15	小甕	5/17-6 焼	赤	上						胎土無味、内面口縁部付まで平打タタキ
75	O-C 新島原	中甕	5/7-2 反	赤	中	31.8			27.4		内面、4.5-36

番号	出土地点	器種	色澤	胎土	焼成	口径	高さ	底径 (高台径)	胴部径 (最大径)	頸部径	見込 高さ	備考 (口縁部残存率)	
76	㉔-B4	中壺	2.5Y6-3に濃い黄	黄	中	26.0			20.5			内5Y5-1黄, 4.5-30	
77	㉔-B4	中壺	10Y4-1正	やや橙2	上	21.5			19.2			内5Y5-2黄オリーブ, 4-36	
78	㉔-O	新巻瓦葺	黄	7.5YR7-6黄	黄	中	26.6		22.6			2.5-36, 内面ホキキ	
79	㉔-O	新巻瓦葺	中壺	5Y5-1正	黄	上						玉縁状口縁	
80	㉔-B5	大壺	2.5Y3-1黄緑	やや橙2	中	50.0			36.4			4-30, 遺状文	
81	㉔-O	新巻瓦葺	大壺	内肉厚瓦	橙	中	36.8					胎土2.5Y5-2灰白, 遺状文	
82	㉔-O	新巻瓦葺+㉔-B4	大壺	5Y5-1正	橙	中	66.0					内肉厚, 6.5-36, 遺状文	
83	㉔-O	新巻瓦葺	大壺	内肉厚瓦	橙	中	49.7			31.8		胎土10YR9-2灰白, 4-24, 遺状文	
84	㉔-C11	大壺	5YR5-4黄緑	黄	中	39.8						胎土焼成, 3-26, 内面へうろこ文, 内面ホキキ	
85	㉔-C11	大壺	5YR7-4に濃い黄	黄緑	上	44.5				24.3		胎土焼成, 2-26, 内面へうろこ文	
86	㉔-B4+㉔-B5	大壺	2.5Y5-1黄灰	黄	中				22.6			タナキHaD	
87	㉔-C1	大壺	内肉厚瓦	橙	中							胎土2.5Y5-1灰白, 遺状文	
88	㉔-C15	大壺	5Y5-1正	やや橙2	上							内肉厚, 遺状文	
89	㉔-C1	大壺	N4/正→5Y7-1灰白	やや橙2	中							灰白・発色	
90	㉔-O	新巻瓦葺	大壺	2.5Y6-1黄灰	黄	中						内2.5Y6-2灰黄, 遺状文	
91	㉔-O	新巻瓦葺	大壺	10YR4-1黄灰	やや橙2	中						内2.5Y6-3に濃い黄, 遺状文	
92	㉔-O	新巻瓦葺	大壺	N5/正	やや橙2	上						内2.5Y6-3に濃い黄, 遺状文, 玉縁状口縁	
93	㉔-B3	大壺	5G黄緑	やや橙2	中							内7.5Y4-1正, 遺状文, 遺黄赤・ウツボ目地	
94	㉔-O	新巻瓦葺	大壺	7.5Y3-1汚7灰	やや橙2	上						内5Y5-1正, 遺状文	
95	㉔-O	新巻瓦葺	大壺	5Y7-1灰白	橙	中						内肉厚, 遺状文	
96	㉔-B5	大壺	2.5Y5-1黄灰	やや橙2	下							胎土焼成発色, 内10YR7-4に濃い黄緑, 遺状文	
97	㉔-O	新巻瓦葺	大壺	N3/地沢	やや橙2	上						内2.5Y6-1黄灰, 遺状文	
98	㉔-C15	大壺	5Y6-1正	やや橙2	中							内肉厚, 遺状文	
99	㉔-O	新巻瓦葺	大壺	2.5Y6-2灰黄	やや橙2	上						内2.5Y6-1黄灰, 遺状文	
100	㉔-C10	大壺	7.5Y2-1黄	黄	中							内2.5Y6-1黄灰, 遺状文	
101	㉔-O	新巻瓦葺	大壺	2.5Y5-1黄灰	やや橙2	中						内5Y4-1正, 遺状文	
102	㉔-O	新巻瓦葺	大壺	5Y7-2灰白	やや橙2	中						内2.5Y7-4正, 遺状文	
103	㉔-O	新巻瓦葺	大壺	5Y7-1灰白	やや橙2	上						内肉厚, 遺状文, 内面ホキキ	
104	㉔-C15	壺	2.5G2黄緑	やや橙2	上							内5Y7-2正, タナキ?	
105	㉔-B1	壺	2.5Y7-2灰黄	黄	中							内5Y5-1正, ホキキDa	
106	表鉢	壺	2.5Y5-1黄灰	やや橙2	上							内2.5Y6-1黄灰, タナキH7→ホキキDa, Hc	
107	㉔-O	新巻瓦葺	鉢形?	2.5Y4-1黄灰	やや橙2	上	17.5					内10YR5-3に濃い黄緑, 外側ホキキ	
108	㉔-O	新巻瓦葺	内肉厚?	2.5Y4-1黄灰	橙	中		[10.2]				内2.5Y6-2灰黄, 胎?→方向ナシ, 内面口にて	
109	㉔-B4	切欠片	7.5YR9-3黄緑	黄	中					全長 10.1	3.0	胎土焼成, 胎土オリーブ	
110	㉔-B4	頂台	2.5Y5-2灰白	黄緑	一						全長 11.8	4.2	赤褐色内面, 外側(ナシ)焼用

第7表 出土土師器観察表

(単位:cm)

番号	出土地点	器種	色澤	胎土	焼成	口径	高さ	底径 (高台径)	胴部径 (最大径)	頸部径	見込 高さ	備考 (口縁部残存率)
111	㉔-O	新巻瓦葺	鉢	2.5Y5-1黄灰	橙	上	37.0				32.9	内2.5Y6-1黄灰, 1-36, 口縁部→内面口ナシ, 内面ホキキ
112	㉔-C14	鉢	2.5Y6-1黄灰	橙	中	34.7			30.8			2-30, 口縁部→内面口ナシ, 外面ホキキ
113	㉔-C15	鉢	2.5Y6-1黄灰	やや橙	上	36.0			29.0			内2.5Y7-2灰黄, 3.5-36, 内面ホキキ
114	㉔-O	新巻瓦葺	瓦割片	N5/正	やや橙	上	25.0		21.2			内2.5Y6-1黄灰, 3.5-36, 口縁部→内面口ナシ, 外側ホキキ
115	㉔-C12	土師	7.5YR7-9黄	黄緑	上							残存長さ2.5, 残存幅2.6

注 1 調査館の胎土は、以下の分類を適用した。

焼黄・粉粒が殆ど見立たない胎土: 黄; 粉粒が若干目立つ胎土: やや橙1; 粉粒の混入はやや少ないが、白色粉末を含む胎土: やや橙2; 焼材粒を含み、白色粉末が3割程度を多く含む胎土: 橙; 粉粒を多く含む胎土

2 ロソクは口縁口縁ナシを指す。

3 底径は、最も狭まりの最もの上として、以下中・下の3段階で判定している。色澤は、原則外表面を記入。内面等異なる場合は、両者欄に記入。

4 調査館の器種分類は北野博司氏の分類(北野1999, 参考文献参照)に従っている。

5 胎土は本文に記した。なお、評定(ホキキ)は口縁部内側にホキキがある製品、評定(無)は口縁部部を削り取られた製品である。

6 焼成温度の胎土は、胎土を正色に変化したものを1単位として決められた1単位、胎土身も胎土に準じたものを最も近い単位とする北野分類に従っている(北野1998)。

7 基本的には、写真等で確認できる胎土は、胎土の色に胎土の部位が付く番号とある。

8 北野博司1999「遺物の観察」(河口書館遺跡誌1)石川麻生埋蔵文化財センター

9 調査館の胎土は、花梅屋謙氏の分類に基づいている。

Ha部: 平行線文(木目直行), Hb部: 平行線文(木目右上斜り文), Hc部: 平行線文(木目左上斜り文), Hd部: 平行線文(木目平行), He部: 平行線文(木目なし)

Da部: 同心円文(木目なし), Db部: 同心円文(車輪状木目), Dc部: 縦目状木目

花梅屋謙 1985「第2期 阿比古文の整理研究-生産形態の解明に向けて-」(河口書館埋蔵文化財センター)

7 土師器の胎土は、焼黄・黄・やや橙・橙の4段階からの相対的評価。

8 [ ] 内の数字は焼成温度, [ ] 内の数字は底径である。

## 第Ⅲ章 松谷寺跡確認調査

### 第1節 調査に至る経緯等

平成18年度からは、隆明寺跡に続き中宮八院の一つである松谷寺跡推定地の確認調査に着手した。松谷寺跡の選定にあったのは、踏査により現地に基壇状の遺構が確認されていたことを根拠として、その確認を行うことを主目的とした。

事前に五国寺町町内会会長に対し調査協力依頼を提出し、地権者を個別訪問し調査への同意を求めた。その後、地権者からの承諾書を得て、石川県教育委員会へ発掘調査報告を平成18年11月21日付けで提出している。調査対象面積が約8,000㎡と広大であり、北陸最古の山林寺院という極めて重要な遺構が検出されたため、都合4か年にわたり調査を実施する結果となった。以下、石川県教育委員会への発掘調査報告提出は、平成19年8月13日付け、平成20年5月26日付け、平成21年7月3日付けで行っている。

事業費については、石川県教育委員会の同意の下、国庫補助事業として実施した。

なお、平成20年度には、5月10日（1回目）と8月11日（2回目）の2回の調査指導会を開催し、調査前と調査後に指導を受けている。調査指導講師は、垣内光次郎氏（財）石川県埋蔵文化財センター特定事業調査グループグループリーダー）、川畑誠氏（石川県教育委員会文化財課世界遺産推進室専門員）で、2回目には和田龍介氏（石川県教育委員会文化財課埋蔵文化財グループ主任主事）にも加わって頂いた。また、平成19年度に記者発表及び現地説明会、平成20年度に松谷寺関連講演会及び現地見学会を開催し、一般公開を行っている。

### 第2節 調査の経過

#### 1. 現地調査の概要

今回の調査は、丘陵頂部に所在する松谷寺跡推定地を対象に行った。丘陵頂部は、近年手入れが全くされておらず見通しの利かない状態であったため、下草刈りを行った。なお、平坦面は大きく南北に分かれた状態で存在したことから、南側調査区と北側調査区に分けて調査を実施した。主として平成18-19年度は南側平坦面（平坦面A）、平成20-21年度は北側平坦面（平坦面B・C）の調査を行っている。調査内容は、試掘調査及び測量調査である。

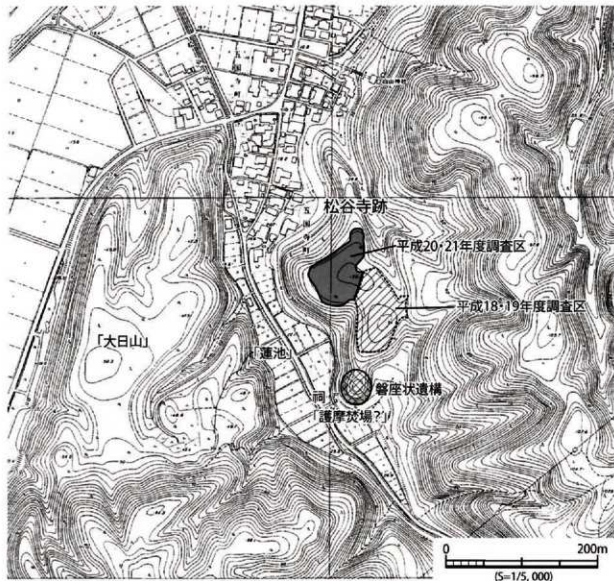
#### 2. 調査の経過

##### 〔平成18年度〕

現地調査期間は、平成19年11月20日～12月25日までである。平坦面Aの地形測量及びトレンチ掘削調査を実施した。地形測量に関しては、調査区内に国土座標を業務委託により2点設定し、そのグリッド点の国土座標（世界測地系Ⅷ系、以下同）を基準として、1/40縮尺10cmコンター図を調査員により作成した。

試掘調査は、5箇所の特レンチを設定し、人力により掘り下げを行い、遺構の確認を主として行った。トレンチ調査に係る測量は、基本的に1/20縮尺で作成している。

遺物は、トレンチ掘削に伴うもの及び遺構の一部掘削で出土したものに限り取り上げた。重要なものに関しては位置の記録を行った（記録作成方法は、以降の年度も同様）。その結果、礎石建物が検出された。



第23図 松谷寺跡 調査地位置図

**〔平成19年度〕**

昨年度調査において検出された礎石建物の規模の確定や、北側の空間地に付属建物がないか確認する目的で補足調査を行った。また、合わせて平坦面B・Cの地形測量（昨年度と同方法）も行った。現地調査期間は、平成19年8月20日～9月27日までで、礎石建物周辺や遺物が出土した地点を中心にトレンチを設定している。

試掘調査は、人力により掘り下げを行い、遺構確認作業を行った。その結果、礎石建物では新たな礎石が検出され、建物規模は2間×4間となった。ただし、平坦面の調査では、若干の遺物が得られた程度で、付属舎等は確認されなかった。

**〔平成20年度〕**

本年度より、平坦面B・Cのトレンチ調査を実施した。試掘トレンチは、平坦面上3カ所に基本となる十字トレンチを設定して、その都度状況に応じて拡張を行った。調査は、人力により掘り下げを行い、主として遺構確認作業を行った。調査期間は、平成20年5月28日～8月19日までである。その結果、基壇状遺構上に礎石建物跡を確認することはできなかった。ただし、基壇状遺構そのものは人工的に造成された可能性が高いことが推察された。基壇状遺構の北側に広がる平坦面上には、礎

石建物の可能性がある区域が3カ所検出され、トレンチを拡張して精査をおこなった。しかし、礎石と考えられる石の残りが悪く、欠損が多かったため、調査指導会において建物跡である可能性が極めて低いと判断された。北端部の一段低く造成された部分（平坦面C）についても、トレンチを設定し調査を実施した。遺物の出土量は、平坦面Aに比べ非常に少ない状況であった。

#### 【平成 21 年度】

昨年度調査を行った平坦面Bの補足調査を実施した。調査期間は、平成 21 年 7 月 13 日～平成 21 年 9 月 15 日までである。第一に、昨年度調査した拡張区 1～3 を再度精査し、建物の柱穴等がないか確認作業を行った。その結果、平坦面を造成した痕跡や小穴は確認されたが、柱穴は検出されず、建物跡は確認できなかった。次に、遺物の廃棄場所を探す目的で、谷部や斜面裾部にトレンチを設定し、人力掘削により調査を実施した。しかし、そのような場所は確認されず、遺物は元々少なかったのか、廃絶時に片付けられたものと判断された。

### 3. 出土品整理

出土遺物は、調査年度中に洗浄・注記・分類・接合作業、実測作業を平成 19・21 年度に臨時整理作業員により行った。また、トレース等の報告書作成作業は、報告年度に実施したものである。

## 第 3 節 確認調査の成果

### 1. 調査地の概要

調査地は、梯川により形成された本谷から、支流である松谷川により形成された支谷のやや奥、右岸側丘陵頂部に位置している。本谷部と平野部の境には、式内社津上神社が鎮座しており、谷奥全体が神聖視された区域だったと考えられる（1）。標高は、丘陵頂部で約 51 m を測る。周辺には、「大日山」や「護摩焚場」などの宗教に因む地名が存在している。また、推定地よりやや谷奥の地点に、清水が湧き出ている地点があり、現在も飲料用に利用されている。特に、寺院跡と尾根続きの南端部分には、巨岩が露出しており、現在でもその下に祠が建てられ信仰対象となっている。その巨岩を磐座とみて神祀りをしてきたことが契機となって、寺院が成立したとする意見がある。一方で、石材の切り出し跡が確認できることから、神聖度が低いとみて、磐座とするには慎重な判断を求める意見もある。加えて、前述の「護摩焚場」がその祠の地点とする記述もある。以上のように、当地域は宗教施設が存在するにふさわしい景観を有しているといえる。推定地である丘陵頂部だけでなく、谷部など広範囲に宗教施設が展開するあり方（特に中宮八院松谷寺において）が想定され、今後の調査に反映する必要がある。

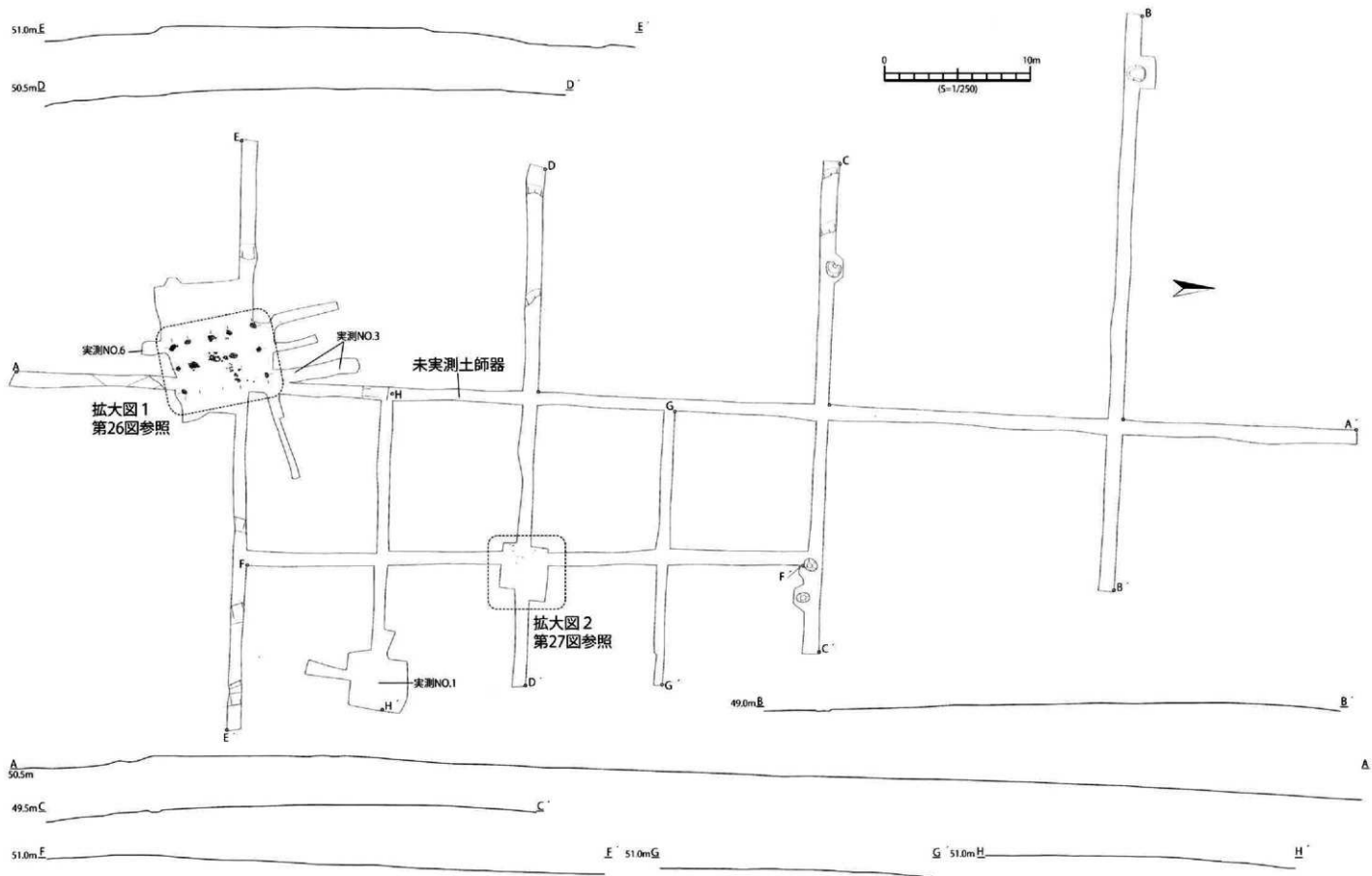
### 2. 平坦面Aの調査

平坦面Aは、南端に造成された基壇状遺構とその北側の広大な平坦面から構成される。基壇状遺構は、たちわり調査を行っていないので未確定だが、削り出し造成と考えられる。特に、西面と南面に大きな造成を加えており、東面及び北面の造成が甘い。その中でも、北面は緩斜面で平坦面と繋がっており、その境を判断するのは困難な状況で、ほとんど造成されていないようである。平面形は、北辺約 17.5 m、南辺約 16.5 m、東辺約 9 m、西辺約 11 m を測り、略台形を呈する。また、南西隅部に一部張り出しが認められる。平坦面との比高差は、最大で約 55 cm 程度である。礎石建物跡は、基壇状遺構の南辺寄りであつ、中央からやや西に寄った位置で検出されている。建物跡周辺の土壌は、焼土や炭化物の粒・ブロックが含まれており、焼失した可能性も考える必要がある。基壇状遺構の面積は約 165 m<sup>2</sup> を測り、建物跡周辺の約 9 割の部分が空閑地として残っており、その空閑地の利用状況についても今後確認する必要がある。









第25図 松谷寺跡 平坦面Aトレンチ実測図



北側に展開する平坦面については、トレンチ3a・4a・5bにおいて段差が確認されたものの、現状では明確な遺構は検出されていない。ただし、基壇Aに近接した北東側の区域において、遺物の散布が認められることから、付属施設が存在する可能性がある。また、平坦面Aの東端に、北方向からの谷と南方向からの谷が結節する叢せ尾根部分に、約10m四方程度の平坦面が盛土により造成されている。その区域の南辺に平行して、礎石の可能性もある石列が確認されている。

### 3. 平坦面A試掘調査の成果

#### (1) 礎石建物1

基壇上において、2間×4間分の礎石が検出されている。現時点では、正面が明確でないため、梁行及び桁行は確定しないでおきたい。主軸はN-14°-W。礎石は表面が風化により剥離しており、依存状況は良いとはいえない。特に、東編間H列の依存状況が悪く、石12は残骸のみであり、石13～15は欠損している状況であった。なお、石15の欠損箇所には、約10cm程度の窪みが確認でき、抜き取りなどの痕跡の可能性はある。石の大きさは、約30cm大～50cm大であり、高さは一定に据えられている。石材は、現地で採取可能な凝灰岩である。建物規模は、約3.4m×5.7mを測り、高麗尺で約9尺×16尺、面積は約19.38㎡である。各礎石間の長さは図を参照して頂きたいが、4間側の列において、B-C間とD-E間の幅がほぼ等しく狭いという特徴がある。E列は基壇縁辺に近い位置にあることから、一番外側の列である可能性が高い。よって、この部分の柱間寸法の狭さは、庇であることに起因する可能性が指摘できる。ただし、B-C間が狭い理由は分らない。この建物が仏堂であるとするならば、須弥壇の位置も不明であり、規模を確定とできない大きな要因となっている。しかし、石8が2石あり規模が大きいため石8-9間の中間に礎石が存在すること、さらに、その東側に小礎の分布がみられることから、この部分に須弥壇が形成された可能性がある。なお、前述のとおり建物正面も確定できていないが、基壇の造成程度の差から、南ないし西側を正面とする意見もある(2)。

遺物は、建物北西隅部に集中して出土しており、須恵器坏蓋極小片2点と須恵器平瓶1点がある。特に、平瓶は破片が比較的広範囲に分布した状態で検出されている。A列の外側に分布しF列の外側には広がっていないことから、A列東側が建物内部であった可能性が考えられる。平瓶は仏供器と考えられることから、この礎石建物を仏堂と評価するものである。また、石15付近からも須恵器坏A底部破片が出土している。時期は、周辺部の土器からⅢ期(田嶋編年、以下同)とみられる。ただし、10～11世紀の土師器食膳具片(実測No.6など)が基壇状遺構A南西端付近から出土していることから、後世に一段高い平場として基壇状遺構が利用されていた可能性も想定する必要がある。一方で、石15の抜き取り痕からは、9世紀前半と考えられる須恵器坏B蓋小片が出土している。後世の混入を否定することができないが、建物跡の廃絶時期を示唆する可能性がある。

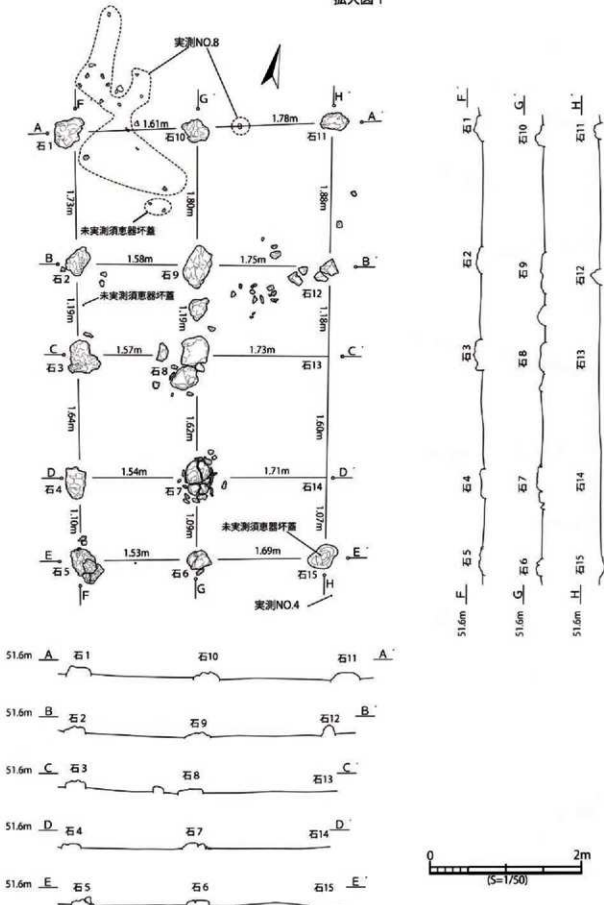
#### (2) 土器散布地

北側平坦面のトレンチA4とトレンチA6が交差する地点において、遺物の集中散布が確認された。よって、トレンチを拡張して面的調査を実施したが、遺構の検出には至らなかった。遺物は、須恵器坏B蓋と土師器片である。土師器片は非クロコ土師器の小片であり、塊形のもの多数を占めるが、一点のみ煮炊具系とみられる破片が存在する。時期は、須恵器坏B蓋からⅢ期と判断され、土師器片も同時期と考えられる。このような遺物の散布状況は、基壇状遺構上を除き、この地点以外では確認することができないのもで、特異な状況といえる。付近に付属倉等が存在した可能性があり、未調査部分での確認調査が必要といえる。

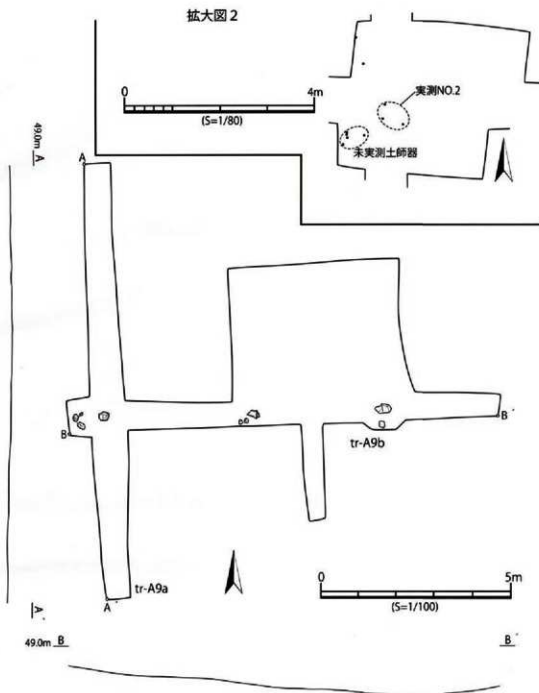
#### (3) トレンチA9

前述の南北の谷が結節する地点の平坦地で、礫片を多く含む盛土で造成されている。また、平坦面

拡大図1



第26図 松谷寺跡 平坦面A礎石建物1 実測図



第27図 松谷寺跡 平坦面Aトレンチ実測図

の南辺に接する形で礎石様の石列が確認されている。石の大きさは、約30～40cm大であり、2間分が検出されている。長さは7.4mを測り、石間は東から3.5m・3.9mと西側の方が長い。谷を登った奥で平坦面Aに接するという立地から、寺院の入口施設とも考えられた。しかし、遺物の出土がなく時期不詳である点や、谷道は近世以降に耕地間を繋ぐ道としてよく利用される点、基壇の造成程度が南辺と西辺が高いということから、その部分を入口とみる意見(3)もあり、その性格は特定できていない。

#### 4. 平坦面Bの調査

平坦面Bは、南端部分に基壇状の遺構があり、北側に広がる平坦面に段差なくつながる点や、基壇状遺構の2辺の造成度が高い点において、平坦面Aと非常に構造が良く似ている。同様に、南側に張

り出しを持つ点も共通項と言えよう。しかし、平坦面Aに比して造成の度合いが低いといえ、特に北側は平坦面の境が判別できない。よって、広さも東西約18m、南北約25mの範囲と想定するのみである。ただし、東側は比較的段差の造作が明瞭であり、トレンチB20箇所では盛土によって造成されたと思われる。一方で、南側も段差は明瞭ではあるが、トレンチB16a-bにより確認したところ、土壌の様子が発達する平坦面Cの状況と類似することから、後世の畑地利用による造成の可能性を考えねばならない。

遺物は平坦面Aよりさらに少なく、基壇状遺構内では、9世紀初頭頃(IV2新时期)の須恵器坏B蓋片のみが確認された。北側平坦面では、多くの造成痕が確認されたが、造成度内から出土する遺物は縄文時代中期前半の土器・石器であり、古代以降に造成されたという確証は得られていない。平坦面南側については、トレンチB3及びB補5によって明瞭な段差が確認されており、人為的に造成されたものと判断できる。平坦面の幅は、南北幅は基壇状遺構との境が不明瞭なため確定できないが最大で33m程度あり、東西幅は最大で約21mを測る。その中で、3カ所礎石建物跡が存在する可能性のある地区が検出されたため、トレンチを拡張して調査を行った。以下詳述する。

## 5. 平坦面B試掘調査の成果

### (1) 造成痕及びピット状遺構

各トレンチより、地山とは土色が異なり固く締まった箇所が検出されている。土中に炭化物を含んでいることから、地山部分と峻別することが可能である。山頂を平坦に造成した時点で埋立て痕跡と考えられる。ただし、造成痕の土中からは、前述のとおり縄文時代の遺物しか検出できていないため、その造成時期を判断するのは困難である。しかし、近世以降の陶磁器も含まれていないことから、それ以前であることはいえる。造成土は、地山褐色粘土を掘削したものがベースと考えられ、ややくすんだ色調となっている。ただし、トレンチB補4-6部分の斜面において、小礫混じりの土で埋められた部分が検出されている。造成時に、小礫混じりの部分を削ったものを西側斜面の小谷部へ落とし込んだものと推察される。また、ピット状遺構も検出されているが、明確に柱穴と確認できるほど硬化面を持つものはなく、遺物も出土していないため性格は不明である。覆土も造成痕と大差ないようである。特に、極浅いものについては植栽痕の可能性が高い(4)。

### (2) 基壇状遺構Bたちわり部分(トレンチB20)

前述のとおり、基壇状遺構Bの南東隅部は礫泥土によって造成されたと思われる箇所である。よって、たちわりによって造成過程の確認を実施した結果、盛土層は大きく4グループに分かれるようである。礫を多く含む1層、礫が粘土質(偽礫質)な2層、地山粘土に非常に近い3層、小礫粒を少量含む4層である。段差部分は、1-C層によって最後に整形されている。なお、3層については、地山とは炭化物を含んでいるかいないかの差だけで、正直掘削するか判断に迷う層であり、整地土と位置付けた。また、トレンチB1でも段差部分において、地山とは異なる層で形成されていることが判明しており、基壇状遺構の東側については、人為的に造成されたものと判断したい。

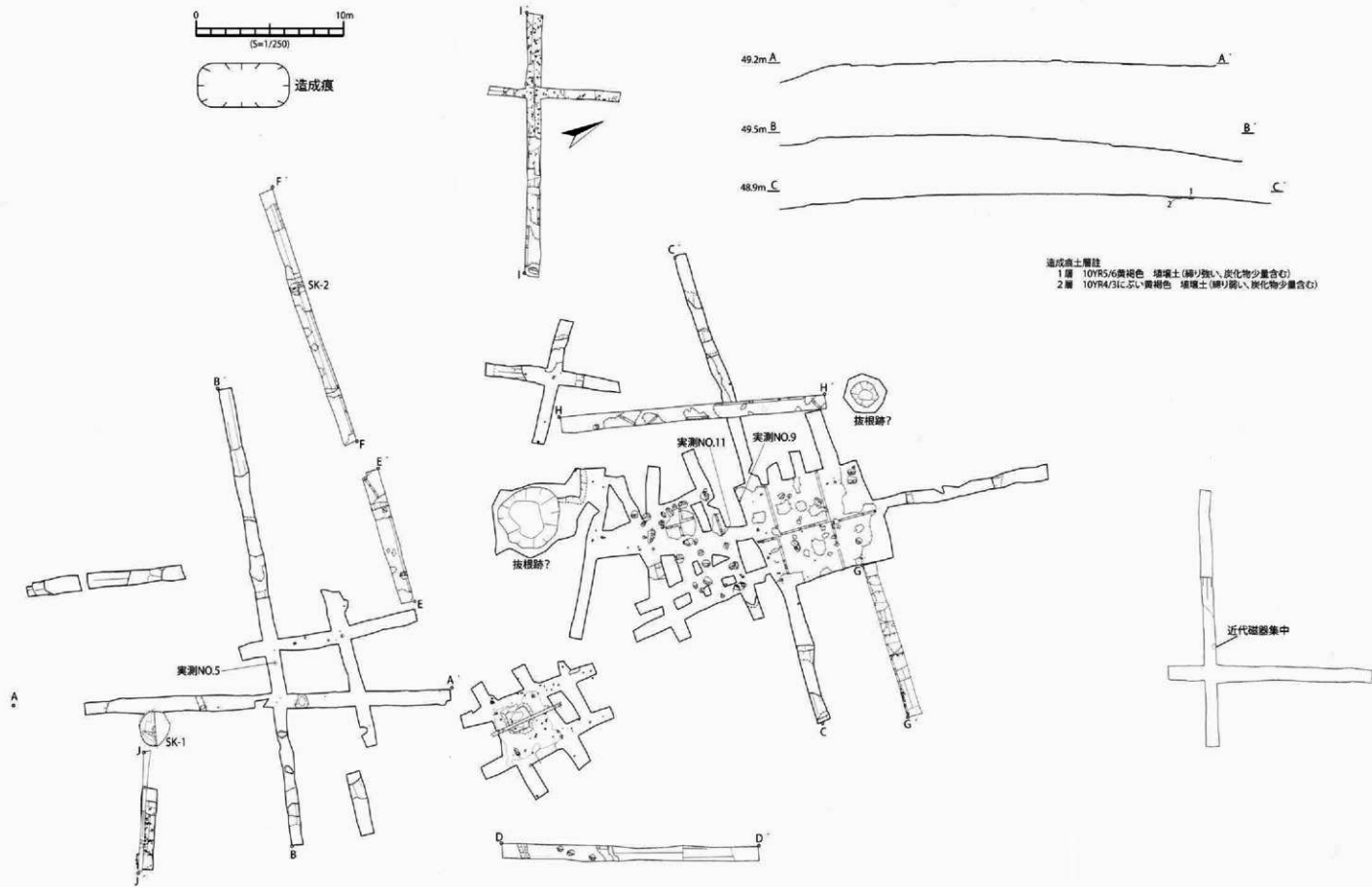
### (3) 平坦面B段差確認部分(トレンチB補5)

平坦面Bの段差部分が人為的に造成されたものか判断するために設定したトレンチである。結果として、2層と3層が造成に伴う盛土ではないかと考えられる。4・5層は、礫を多く含む土層となるが、炭化物が含まれたので外した部分であり、以下の地山との峻別が難しい。しかし、平坦面で確認される造成痕と合わせて判断すれば、この段差も人為的な造成と判断して良いと考える。

### (4) 拡張区1・3

当該地区は、板状の扁平石が確認されたため礎石建物の可能性も想定して拡張した区域である。た

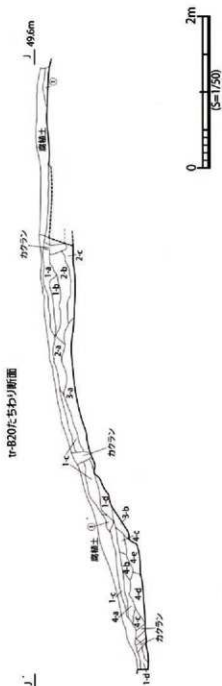




第28図 松谷寺跡 平面面B・Cトレンチ実測図





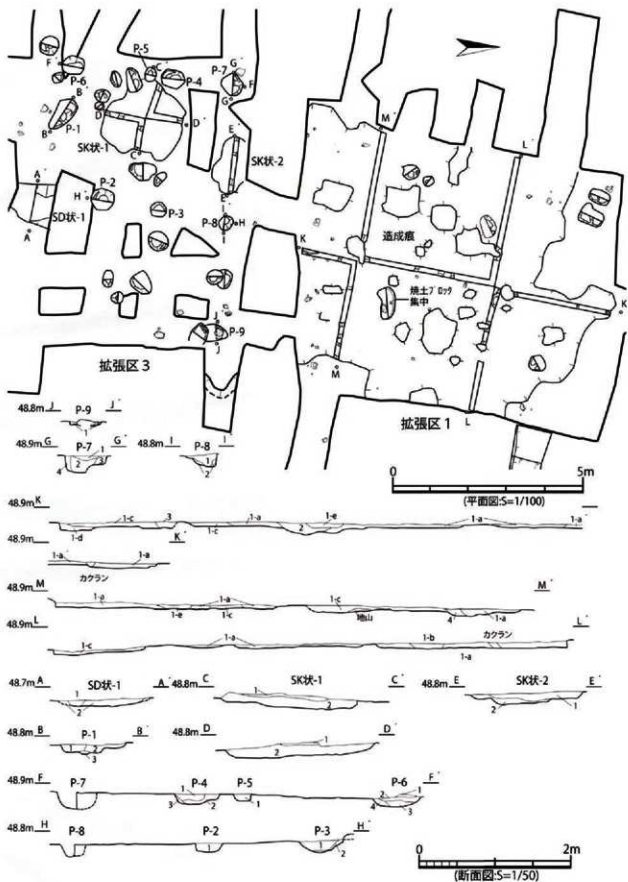


11-820たちわり断面

11-820断面土層註

- (0)層 10YR5/4Lに近い黄褐色 腐植土(しじりやや強い)
- (1)層 10YR4/6緑色 腐植土(しじりやや強い)
- (腐土1)
- 1-a層 2.5YR5/6明褐色 腐植土(粘性つよい)が砂混入、1~4mm大程度多量に含む、凝灰岩層に比べてなく(腐植土少量含む)
- 1-b層 2.5YR6/6暗褐色 腐土(微黄-灰色)、1-a層と同様の構成を多量に含む、炭化物(炭少量含む)
- 1-c層 2.5YR5/4Lに近い暗褐色 腐植土(粘性多)が砂混入、3mm大程度多く、腐り強い、ただしシースとなる土は凝灰岩(腐り炭化物少量含む、大層も凝灰岩にあり)
- 1-d層 2.5YR4/4暗褐色 腐植土(粘性)が砂混入、腐り強い、2mm大程度多く含む、5mm大程度に含むが(腐り炭化物少量含む)
- (腐土2)
- 2-a層 5YR6/6暗褐色 腐土(腐り)が砂混入、腐り非常に強い、腐は2mm以下が主体)
- 2-b層 5YR6/6暗褐色 腐土(腐り)が砂混入、腐り強い、腐は2mm以下が主体)
- 2-c層 2.5YR6/6暗褐色 腐土(腐り)が砂混入、腐り強い、腐は2mm以下が主体)
- (腐土3)
- 3-a層 2.5YR5/6明褐色 腐土(腐り)が砂混入、腐り強い、腐は2mm以下が主体)
- 3-b層 2.5YR5/6明褐色 腐土(3-a層より腐り強く、白色腐植土少量含む)
- (腐土4)
- 4-a層 2.5YR4/4暗褐色 腐土(粘性)が砂混入、腐り強い、1cm大程度多量に含む、炭化物(炭含む)
- 4-b層 2.5YR5/6暗褐色 腐土(4-a層より粘性が強く、腐り強い、1cm大程度多量に含む、炭化物(炭少量含む)
- 4-c層 2.5YR4/4暗褐色 腐土(粘性)が砂混入、腐り強い、1cm大程度多量に含む、炭化物(炭少量含む)
- 4-d層 2.5YR4/4暗褐色 腐土(4-d層より粘性が強く、腐り強い、白色腐植土少量含む)
- 4-e層 2.5YR5/6明褐色 腐土(4-d層より粘性が強く、腐り強い、白色腐植土少量含む)

第30図 松谷寺跡 平坦面Bトレンチ断面図



第31図 松谷寺跡 平坦面Bトレンチ拡張区1・3実測図

拡張区 1 造成痕たちわり断面土層註

- 1-a層 7.5YR5/4にぶい褐色 埴土(締り強い、炭化物ブロック少量含む)
- 1-a 層 若干締り強く、粘性強い
- 1-b層 7.5YR5/6明褐色 埴土(締り強い、炭化物ブロック少量含む)
- 1-c層 7.5YR5/4にぶい褐色 埴土(締り強い、炭化物粒少量含む、1-aより混入物少なく粘性強い)
- 1-d層 7.5YR5/4にぶい褐色 埴土(締り非常に強い、1-aよりやや強い)
- 1-e層 7.5YR5/4にぶい褐色 埴土(締り強い、1-aよりやや強い)
- 2層 10YR5/6黄褐色 埴壤土(締りやや弱い、炭化物粒少量含む)
- 3層 10YR5/6黄褐色 埴壤土(締り強い)
- 4層 10YR5/6黄褐色 埴土(締り強い、粘性強い)

地山 7.5YR5/6明褐色 埴土

拡張区 3

P-1土層註

- 1層 10YR5/6黄褐色 埴土(締り強い、10YR5/6灰黄褐色埴土少量混入、炭化物粒・軟岩屑極少量含む)
- 2層 7.5YR5/6明褐色 埴土(締り強い、炭化物粒・ブロック少量含む)
- 3層 7.5YR5/6褐色 埴土(地山か?)

P-2-P-5土層註

- 1層 10YR5/6黄褐色 埴土(締り強い、炭化物粒少量含む)

P-3土層註

- 1層 P-2の1層と同じ
- 2層 7.5YR5/6明褐色 埴土(締りやや弱い)

P-4土層註

- 1層 10YR5/6黄褐色 埴壤土(締り強い、炭化物粒少量含む、焼土ブロック極少量含む)
- 2層 10YR5/6黄褐色 埴土(締り強い、粘性やや強い、炭化物粒・ブロック少量含む)
- 3層 7.5YR5/6明褐色 埴土(締りやや弱い、炭化物粒極少量含む)

拡張区 3

SD状1土層註

- 1層 10YR5/6黄褐色 埴土(締り強い、炭化物粒極少量含む)
- 2層 7.5YR5/4にぶい褐色 埴土(締りやや弱い、炭化物粒少量含む)
- SK状-1土層註
- 1層 10YR5/3にぶい褐色 埴壤土(締りやや弱い、2層土ブロック含む)
- 2層 10YR5/6黄褐色 埴土(締り強い、炭化物粒・ブロック少量含む)
- SK状-2土層註
- 1層 10YR5/4にぶい黄褐色 埴土(締り強い、炭化物粒・ブロック少量含む)
- 2層 10YR5/6黄褐色 埴壤土(締り強い、炭化物粒極少量含む)

拡張区 3

P-6土層註

- 1層 SK状-1の1層と同じ
- 2層 10YR5/6黄褐色 埴土(締り強い、炭化物粒少量含む)
- 3層 7.5YR5/6明褐色 埴土(締り強い、炭化物粒極少量含む)
- 4層 7.5YR5/6褐色 埴土(締り非常に強い、炭化物粒極少量含む)

P-7土層註

- 1層 10YR5/6黄褐色 埴土に10YR5/3にぶい黄褐色埴土混在(締り強い、炭化物粒少量含む)
- 2層 10YR5/6黄褐色 埴土(締り強い、炭化物粒少量含む)
- 3層 10YR5/6明黄褐色 埴壤土(締りやや弱い、炭化物粒極少量含む)
- 4層 7.5YR5/6明褐色 埴土(締り非常に強い、炭化物粒極少量含む)

P-8土層註

- 1層 10YR5/6黄褐色 埴土(締り強い、炭化物粒極少量含む)
- 2層 7.5YR5/4にぶい褐色 埴土(締り強い、粘性強い)

P-9土層註

- 1層 10YR5/6黄褐色 埴土(締り強い、炭化物粒極少量含む)

だし、石に関しては、基壇A上に比して最大でも30cm大であり、厚も貧弱である。加えて、建物跡と判断するには欠損する箇所が多く、P-9以外に地山に設置痕のような明確な痕跡を見いだせない。全国的には、地盤が良好な寺院跡では、礎石の貧弱な例もあるそうだが、現状では否定される要素が多い。よって、調査指導会においても、建物跡である可能性が極めて低いと判断された。

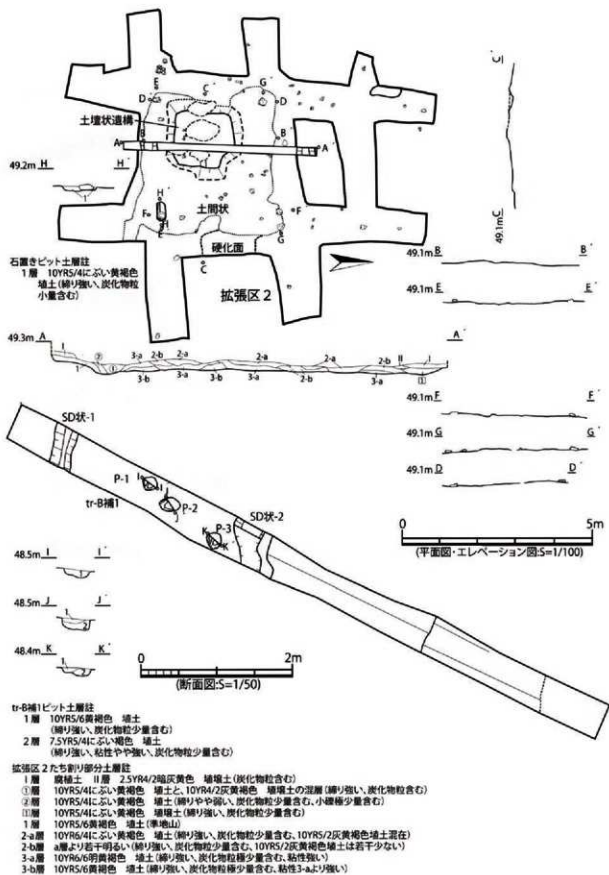
また、拡張区1では全域を覆うような大規模な造成痕が検出されている。ただし、ここでも遺物は縄文土器片のみであり、古代のものは出土していない。拡張区3においても同様であり、土坑状遺構や溝状遺構も造成痕の一種と考えられる。ピット状遺構についても、柱穴と認められる硬化面を持つものは確認できなかった。ただし、P-7からは、縄文時代中期前半と考えられる石簾(実測No.10)が出土している。平坦面造成時に、縄文時代中期前半の遺跡が壊された可能性がある。

(5) 拡張区 2

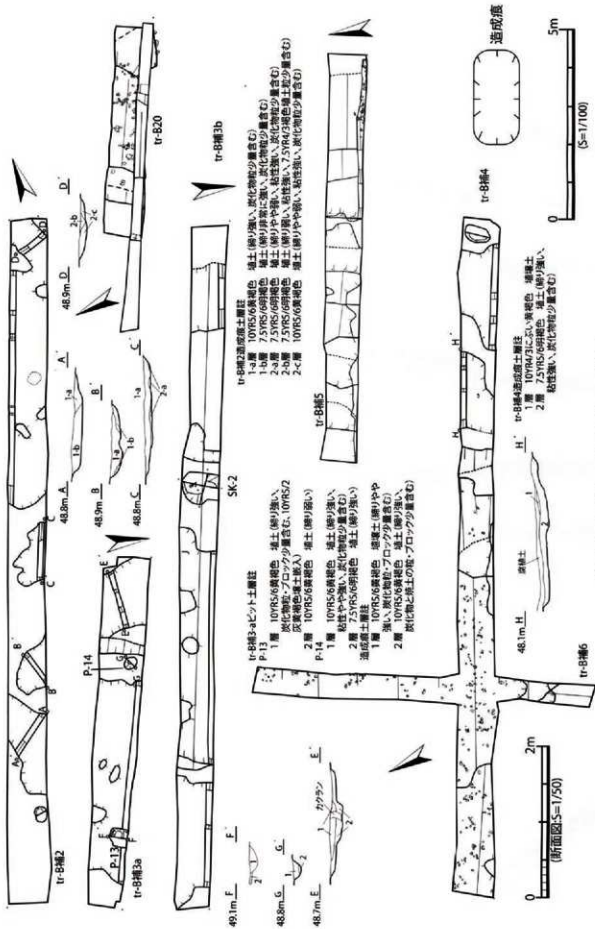
当地区についても、礎石棟石の検出によって拡張した区域である。約4m四方に踏み固められた土間状空間の中に、約3m四方に配石された状態で検出された。また、土間状部分の西側に寄った箇所から、約2m四方の土境状遺構も検出されている。よって、1間×1間の小規模建物の存在が想定されたものである。たちわり調査により、北側端と南側端に雨落ち溝的な溝状遺構も確認されたが、礎石とされる石の貧弱さは否めない。石は20~25cm程度であり、H-H'箇所以外は据置いた状態とはいえない。また、溝状遺構も南側のものはトレンチB補1の溝状1に、硬化面とした箇所も同トレンチ溝状2につながるようで、地境や山道の可能性もある。遺構としては山仕事における材木の一時的な置場に類似する(5)そうであり、遺物が伴わない以上、建物跡の可能性は低いと判断される。

(6) 土坑

SK-1は、測量調査時から開口していた円筒状の土坑で、長径約230cm、深さ約140cmを測る。確認段階で、約中位より上の部分は土砂が堆積していない状態であった。底面は完全なフラットではなく、中央部がやや高い形状であり、その部分に極浅い小ピット状の凹みが確認されている。壁面は、崩落によりオーバーハングした状態である。土砂の堆積は、まず隅部が壁面崩落土で埋まった後、流土堆積と崩落を繰り返したような状況である。ただし、中央3層部分段階で有機物の腐植土が見られ

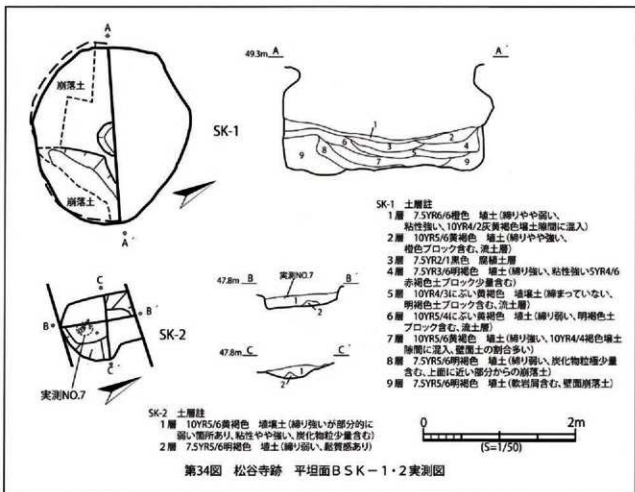


第32図 松谷寺跡 平坦面Bトレンチ・拡張区2実測図



第33図 松台寺跡 平坦面Bトレンチ作業図





る点は、堆積過程に変化があったことが推察される。遺物は、実測 NO. 5 と同一個体と考えられる須恵器杯B蓋片が出土しているが、壁面崩落土内からであり、SK-1には伴わないと考えられる。ただし、基壇状遺構の造成時期を示す可能性は残されていると考えられる。

SK-2は、トレンチB補3-bから検出されたもので、土坑状ではあるが造成痕の一つかもしれない。略長方形で長径1m以上、短径84cm、深さ15cm程度を測る。遺物は、埋土上位からではあるが、ロクロ土師器塊A一(全破片はない)が破片状で一か所に集中して出土している。時期は10～11世紀としか判断できないが、平坦面Aにも同様の底部破片が1点出土しており、平安時代中～後期に何らかの活動があったことが想定される。

#### 6. 平坦面Cの調査

平坦面Bの北側に、人工的に造成された面が確認されたため、トレンチ調査により状況確認を行った。その結果、各所に地山土ブロックが混在した締りのない区域が検出され、近代以降とみられる磁器が出土したことから、後世に畑地利用された面であると判断された。

## 第4節 出土遺物

### 1. 出土遺物の概要

遺物の出土量は非常に少なく、片付けを行い別の場所にまとめて捨てられた可能性が高い。その内訳は個体識別後の点数で、須恵器13点（坏A2・坏B蓋8・平瓶1・貯蔵具片1・不明1）、土師器8点（非ロクロ塊3・煮炊具片1・ロクロ塊（浅型）1・ロクロ塊1・ロクロ食膳具片2）である。

須恵器の産地別では、南加賀窟12点・能美窟1点と南加賀窟に主体があるようである。また、平坦面AとBでは、平坦面B出土は須恵器坏B蓋1点・土師器塊1点のみであり、圧倒的に平坦面A上が多い。時期別には、Ⅲ期（8世紀第2四半期頃）の資料が主体で、須恵器9点・土師器4点を占める。次にⅣ2（新）期（9世紀初頭頃）の資料が須恵器2点、10～11世紀代の土師器が4点である。ただし、器種で主体を占める坏B蓋に対応するような坏Bの破片は全く出土していない。

これら以外では、縄文時代中期前半とみられる深鉢片が4点出土しており、同時期と考えられる石器も2点出土している。

#### 1. 奈良時代の遺物（図35-1～4・8）

1・2は須恵器坏B蓋であり、基壇状遺構A近接の北東側平坦面から出土している。2は、焼き歪みが大きい個体で、天井部に削り調整が施されているが、降灰により範囲は特定し難い。3・4は須恵器坏Aで、礎石建物1周辺から出土したものである。3は、やや焼きが甘いのが、箱型の直立した体部を持つ器形であり、須恵器群をⅢ期と判断する指標である。8は、平瓶で胎土及び出土状態から同一個体と判断し、復元実測したものである。器表面や口縁端部から口縁内部上位部分まで細かい刺蝟が認められる。器形的にはⅡ3期から存在するが、前述の坏Aと同時期と考える方が自然であろう。

以上、全て南加賀窟産と判断される。なお、Ⅲ期の遺物は礎石建物周辺部や近接地に集中して分布している。

#### 2. 平安時代の遺物（図35-5～7）

5は須恵器坏B蓋である。口縁部に折り曲げを施し、天井部の削り調整も省略か狭い範囲と考えられる。重ね焼き痕跡から、蓋を逆位に置く状態（Ⅱ類）で焼成されている。胎土は精良であり、能美窟産である。時期は、田嶋福年Ⅳ2新时期頃とみられる。

6・7はロクロ土師器の底部であり、両者とも回転系切り底である。6は、底部の大きさ及び器壁の薄さから、やや小型の浅型塊Aと考えられ、10世紀代でも後半以降の遺物と考えられる。7は塊Aで、10～11世紀代と考えられる。

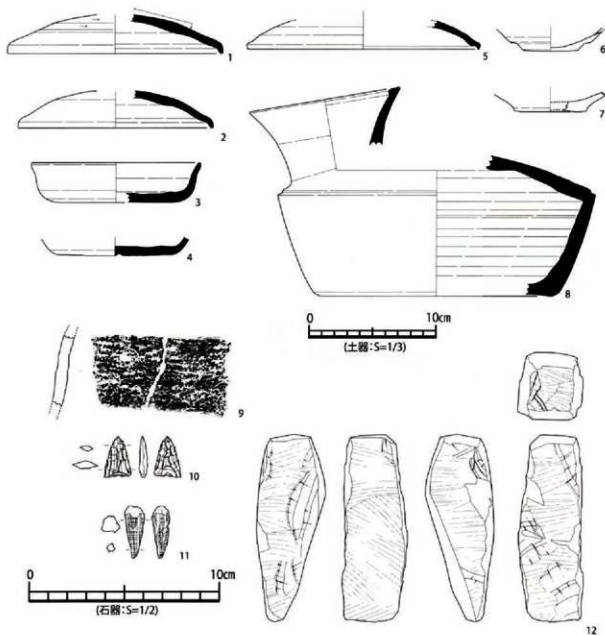
#### 3. 縄文時代の遺物（図35-9～11）

9は深鉢の破片と考えられ、平坦面B拡張区1の造成土内から出土している。胎土は比較的精良で、砂粒の混入は少ないが橙色粒が目立つ。中期前半のものと考えられる。10は、平坦面B拡張区3P-7から出土したもので、打製石鏃である。石材は、玻璃質デイスイトである。11は平坦面B拡張区3出土で、石鏃状に先を尖らしたものであるが、使用痕は不明である。石材は、水晶である。

以上のように、縄文時代の遺物は、現状では平坦面B側の尾根上でのみ確認されている。

#### 4. その他の遺物（図35-12）

12は、トレンチB補4-bから出土した砥石である。砥面は1面のみであり、他は整形のみである。仕上砥と考えられるが、時期不詳である。



第35図 松谷寺跡 出土遺物実測図

第8表 出土遺物観察表

(単位 cm)

番号	出土形式	種類	器種	色調	胎土	焼成	口径	器高	底径 (適合径)	胴径 (最大径)	胴高	耳高 (みね)	備考 (口縁部残存率)
1	Ⅱ-AaB・図参照	深鉢部	鉢台蓋	2.5Y7/2 灰黒	角加賀	上	17.0						内面 2.5Y6/2 灰白, 13.5/36
2	Ⅱ-AaB・図参照	深鉢部	鉢台蓋	2.5Y7/2 灰黒	角加賀	上	15.4						内面 2.5Y6/1 灰白, 輪弁小丸, 12.5/36
3	図参照	深鉢部	鉢台	2.5Y6/1 黄灰	角加賀	中	13.4	3.2	11.0				内面 2.5Y7/1 灰白, 0.5/36
4	図参照	深鉢部	鉢台	ⅡA4 灰	角加賀	上			9.6				
5	図参照	深鉢部	鉢台蓋	2.5Y7/1 灰白	地美	中	18.2						内面 2.5Y6/1 黄灰, 5K-1 と同一, 7/36
6	図参照	土師器	埴	10YR6/3 透黄褐色	埴	上			4.4				
7	5K-2	土師器	埴	10YR7/4 に近い黄褐色	埴	上			5.0				
8	図参照	深鉢部	平皿	ⅡA4 灰	角加賀	上	12.0	16.5	16.0	25.0	7.5		口径 18 点, 8/36
9	灰塚区 1 (図参照)	縄文土器	深鉢	10YR6/3 透黄褐色	埴	上							

注 1 土師器の胎土は、焼成・具・ヤや輪・轆の4段階からの相対的評価。

2 焼成は、焼き跡まりの長いものを上として、以下中・下の3段階で判定している。色調は、原料断面を記入、内面特異な場合は、裏面側に記入。

3 ( ) 内の数値は径寸値である。

第9表 出土遺物観察表 2

番号	遺物名	種類	器種	表面色調	寸法 (mm)	重量 (g)	備考
10	灰塚区 3 P-7	打製石器	石錐	5YR3/1 セリノツギ	残身長 2.02/ 幅 1.39/ 厚さ 0.355	0.82	破損著しいヤイト
11	灰塚区 3 (図参照)	打製石器	石錐?	透明 (白色層分も入り)	全長 2.695/ 幅 0.91/ 厚さ 0.82	2.26	水晶
12	Ⅱ-4D 塚 4 b	石器	碇石	10YR6/3 に近い黄褐色	残身長 0.83/ 残存幅 3.39/ 残存厚 3.54	152.24	波紋岩

## 第5節 小結

今回の調査では、12世紀代の遺構・遺物が未確認のため、中宮八院「松谷寺」について手掛かりを得ることはできなかった。しかし、8世紀前半までに遡る古代山林寺院跡が発見されるという、予想外の成果が得られた。今回の遺跡については、調査指導会での助言を基に「松谷庵寺跡」と呼称を改めることとした。また、評価についても、今後の確認調査の結果をもって確定することとした。ただし、現時点でも、北陸地域及び地方での山林寺院成立時期を8世紀前半にまで遡らせる可能性を高めたことや、当該地域（後の能美郡）において、修行場である山林寺院と考えられる当遺跡に対応するような平地寺院が存在した可能性を高めた（6）ことは評価可能である。これらの事項は、後の加賀国府・国分寺成立問題にも絡む重要な発見といえる。

最後に、今回の調査結果と中宮八院松谷寺との関係性を若干述べて小結としたい。「松谷寺」は、元徳2年（1330）白山中宮八院衆徒等申状案に、応保3年（1163）に目代・在庁官人等により寺地を寄進されたとある寺院である。その文書には中宮八院（隆明寺と善興寺除く、末寺岩藏寺あり）の由緒が記されており、その全てが国衙の守・目代・在庁官人などにより、建立または保護された寺院であったことがわかる。初めから中宮の末寺であったかどうかはわからず、国衙勢力と密着した寺院であったものが次第に白山信仰と結びつきを強め、久安3年（1147）白山が比叡山の末寺となった以降、中宮八院として組織化されていったものと推察されている（7）。ただし、同文書において、松谷寺だけが白山を開いた泰澄の開基を主張している点に注意する必要がある。これは、泰澄伝承が加賀にも鎌倉期に伝わっていたことを示すと同時に、今回の調査でその時代の山林寺院の存在が証明されたことから、当時「古跡」と主張するだけの古文書や伝承といった根拠があったことがいえそうだ。加えて、「白山記」には、応和年中頃（961～963）に加賀国能美郡松谷の人如是房、同国白山檜新宮を建立したと伝えている。10世紀中頃にも僧侶が住し、白山加賀馬場・禪定道の整備に関与した可能性も考えられている（8）。「松谷」と白山信仰との関わりが、この時期まで遡る可能性を示す史料であり、中宮八院成立の全史として重要な記述である。今回の調査で、10世紀後半以降の土器が平坦面A基壇状遺構上から出土したことは、松谷の人「如是坊」の坊舎を考える上で重要である。もちろん、数点の土器が直にこの史料と結び付くわけではないが、同時期の活動を示す可能性があるという点では貴重な発見である。よって、今回の調査結果においても、十分に中宮八院松谷寺の解明につながる成果があったといえる。しかし、当地において、12世紀以降の痕跡が発見できない理由は何故であろうか。近接地には、同じ場所で寺域拡張を行い中世寺院へと転化した浄水寺跡が存在するが、当地では場所を移したのであろうか。中宮八院推定地について、中世寺院として僧房のあり方を視点に入れた検討が必要との指摘がある（9）。今後の調査では、背後の丘陵地や松谷川の流れる谷部、さらには対岸の大日山山頂の平場など、包蔵地指定区域以外にも視野を広げる必要がある。

註 古代土器は、望月精司氏、縄文時代遺物については宮田明氏のご教示を得ている。

1・6 久保智康 2008 「古代山林寺院の展開と松谷寺」『第25回まいぶん講座』小松市教育委員会

2～5 調査指導会での垣内光次郎氏指摘事項

7 本越祐壽 2005 「加賀国府と中宮八院」『フォーラム白山信仰の世界』小松市教育委員会

8 松山和彦 1998 「第二章白山禪定道 第一節白山信仰の展開と禪定道の成立」『信仰の道』歴史の道調査報告書第5集石川県教育委員会

9 上原真人氏教示



0-0 断面灰層の状況



トレンチB 5 灰層確認状況



トレンチB 4 b モノバラ確認状況



平坦面現況



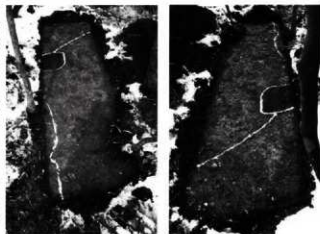
調査の様子



トレンチB 2 掘削状況(西より)



トレンチB1 SK-01半截状況



トレンチA 6 周溝プラン(左:南より, 右:北より)



トレンチB 2 SK-02確認状況



トレンチA 6 周溝遺物出土状況



トレンチA7-a (南より)

トレンチ  
A7-a  
(北東より)



トレンチA7-b (西より)



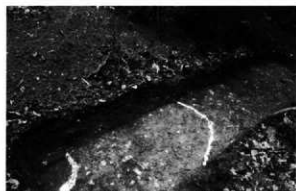
トレンチ  
A7-b  
(東より)



トレンチ  
A7-c  
(西より)



モノバラ崖面の様子



トレンチB4-bテラス面(北西より)



トレンチB4-a



0-0 断面灰層近影



トレンチC14灰層検出状況



トレンチB4 塚状遺構検出状況



トレンチC2配石墓確認状況(正面)



トレンチC15遠景(北より)



トレンチC15配石墓 石塔崩落状況(正面)



トレンチC15南端箇所 配石墓検出状況(背面)



トレンチC10配石墓確認状況(正面)





51 (正面)



51 (坏部内面)



51 (坏部外面)



85



105 (D c 痕)



106 (平行線あて具痕)

立明寺窯跡出土(須恵器)



116



凹面



凸面



117

(軒瓦類部  
接着のための  
カキメ痕)



121



凹面



118



凸面



凸面

125



119



120



凹面



凹面

123



(丸瓦縄目タタキ痕跡拡大)

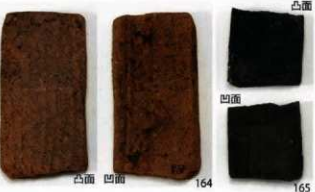
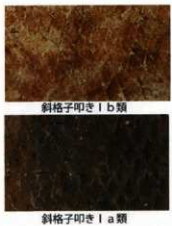
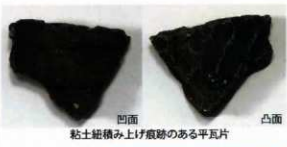


凸面 凹面

126

124

立明寺窯跡出土(軒平瓦・丸瓦)



立明寺窯跡出土平瓦・製斗瓦



道泉寺・クボタB遺跡地区出土遺物



立明寺古墳出土遺物

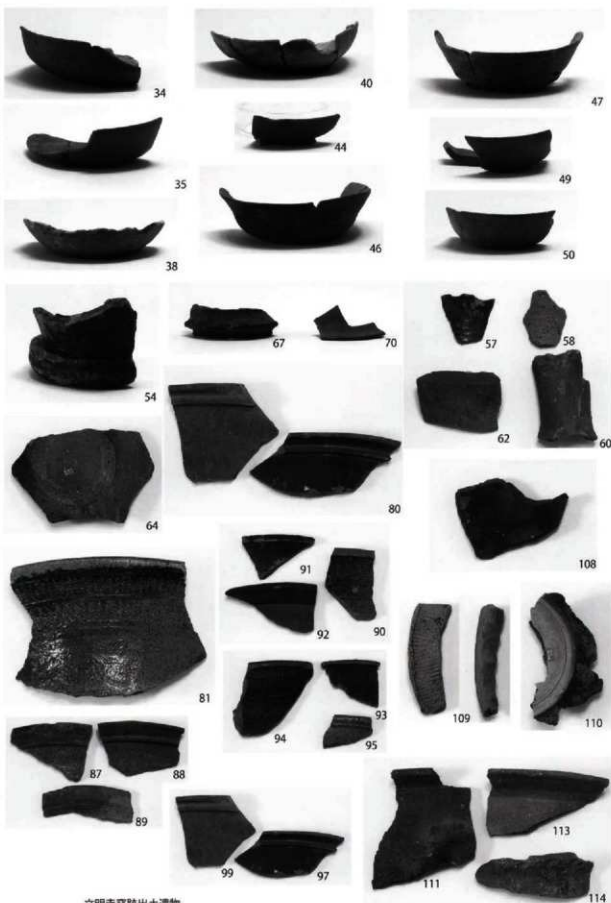


立明寺中世墓群出土遺物



立明寺窯跡出土遺物





立明寺跡出土遺物



平坦面A礎石建物遠景(北東より)



平坦面A礎石建物(北より)



平坦面A礎石建物(北東より)



平坦面Aトレンチ10a・b掘削状況(北東より)



平坦面A現況



トレンチ掘削状況



トレンチA5b(基壇東側段差)



トレンチA1e(基壇南側段差)



トレンチA5a(基壇西側段差)



トレンチA1d(基壇北側段差)



トレンチA4b拡張面



トレンチA8b拡張面



平坦面B現況



トレンチB19(基壇状遺構東側段差)



トレンチB20 礫層検出状況



トレンチB20たち割り状況(北より)



トレンチB16a(基壇状遺構南側段差)



拡張区1(東より)



トレンチB補5(拡張区1部分段差確認)



トレンチB補4・6礫層確認状況(西より)





拡張区 1 造成痕確認状況(南西より)



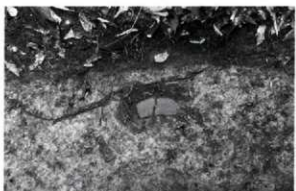
拡張区 2 土壇状遺構確認状況(北東より)



拡張区 2 土壇状遺構九ち割り状況



拡張区 3 確認状況(北東より)



拡張区 1 造成土内縄文土器出土状況



拡張区 3 SK 状 1 ち割り状況



SK - 土層断面



SK - 2 遺物出土状況



1



2



5



3 (外面)



3 (内面)



4



8



9 (外面)



9 (内面)



6



7



10



11



6 (底面)



7 (底面)



12

## 報告書抄録

ふりがな	こまつないいせきはくつちょうさほうこくしょ8							
書名	小松市内遺跡発掘調査報告書6							
副書名	陰明寺跡確認調査・松谷寺跡確認調査							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	川畑謙二							
編集機関	小松市教育委員会							
所在地	〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地 TEL0761-22-4111							
発行年月日	西暦2010年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
陰明寺跡	石川県小松市立明寺町	17203	03260	36° 24′ 13″	136° 31′ 17″	2004.12.14～ 2005.3.25 2006.2.28～ 2006.3.24	約5,900	確認調査
遊泉寺・クボタB遺跡	石川県小松市立明寺町	17203	03262	36° 24′ 12″	136° 31′ 14″	2004.12.14～ 2005.3.25	約4,000	確認調査
松谷寺跡	石川県小松市五国寺町	17203	03283	36° 22′ 34″	136° 30′ 34″	2006.11.20～ 2006.12.25 2007.8.1～ 2007.9.27 2008.5.28～ 2008.8.19 2009.7.13～ 2009.9.15	約8,000	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
陰明寺跡	寺院跡	古墳・平安?	円墳・雑敷遺構		古式土師器		立明寺古墳を新規発見。	
要約	中期初頭頃の古墳(円墳)を確認。能美古墳群における当該期の南限と考えられる。寺院跡については不明。							
遊泉寺・クボタB遺跡	散布地	飛鳥・平安・中世	土坑・竪井・中世墓	須恵器・土師器・瓦・中世陶器(加賀)・石造物(五輪塔)		立明寺窯跡・立明寺中世墓群を新規発見。		
要約	室町時代前半の中世窯(配石墓群)と白鳳期の瓦陶兼業窯を確認。特に、窯跡は現存する当該期の瓦陶兼業窯としての価値に加え、能美地域に白鳳期寺院の存在を示唆するものとして重要な発見となった。							
松谷寺跡	散布地 寺院跡	縄文中期 古代	基壇状遺構2・礎石建物1・土坑2		縄文土器、石器 須恵器、土師器、石器		8世紀前半に遡る古代山林寺院跡を確認。	
要約	確認された古代山林寺院跡は、地方における山林寺院の事例では最古の部類に入る。仏教の地法への伝播過程や、能美地域にも対応する平地寺院が存在した可能性を示唆するなど、古代仏教史研究において重要な発見となった。ただし、中宮八院松谷寺は未確認であり、遺物に断絶があり、発見された古代山林寺院との関係も不明である。							

小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅵ

隆明寺跡確認調査

松谷寺跡確認調査

2010年3月31日 発行

編集・発行 石川県小松市教育委員会

印刷 鶴川印刷株式会社